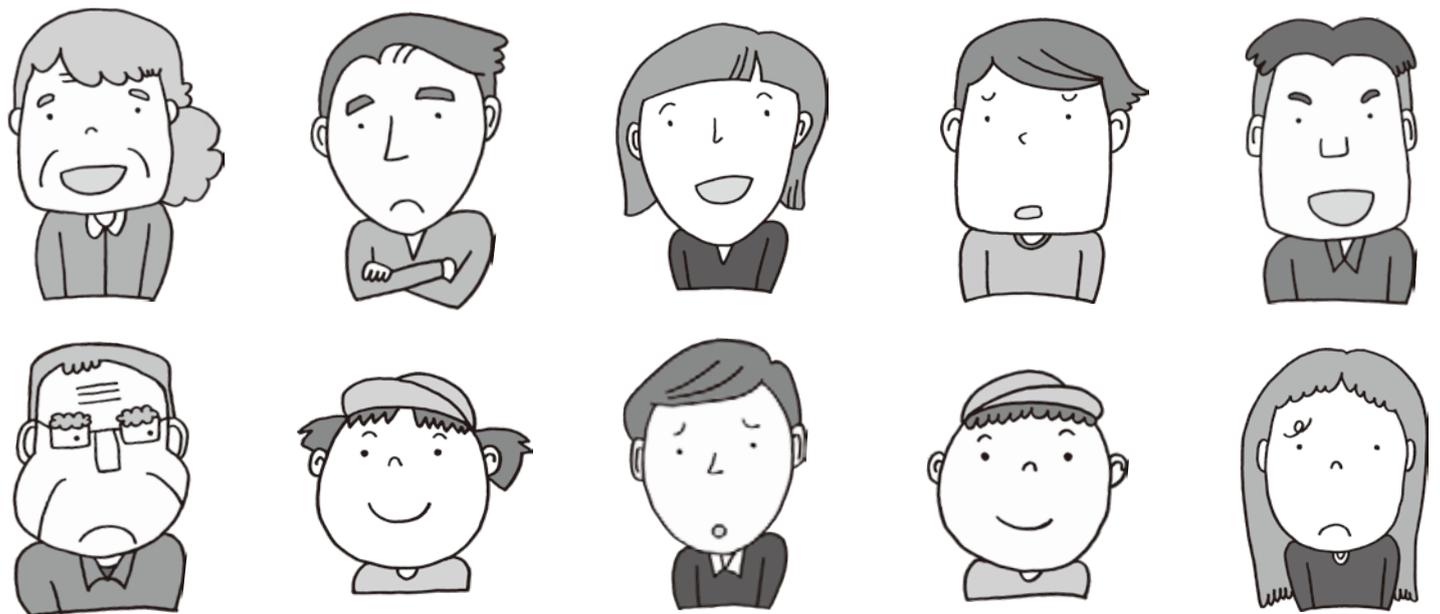


# 学生と地域のホンネ

大学のコーディネーション力を生かす



2016年3月

関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会  
(事務局：社会福祉法人 大阪ボランティア協会)

# 目次

はじめに	1
この冊子の使い方	2
◎「準備編」	5
事例 01：学生に対する誤解	6
事例 02：大学ボランティアセンターに対する誤解	8
事例 03：地域や学生に対する誤解	10
事例 04：ボランティアに対する誤解	12
事例 05：ボランティアと活動する秘訣：ボランティアマネジメント	14
事例 06：企画をさらに練る必要がある場合	16
事例 07：リスクにどう対応する？	18
事例 08：お金にまつわる誤解	20
事例 09：ボランティア経験は「就職活動」に生かせる？	22
◎「実践編」	25
事例 10：学生の主体性を高めるには	26
事例 11：学生のマナーが悪い？!	28
事例 12：使うメディアの違いをどう乗り越えるか？	30
事例 13：ハラスメントの問題	32
事例 14：ボランティア学習に対する誤解	34
事例 15：サポートが必要な学生によるボランティア	36
◎「展開編」	39
事例 16：ボランティアコーディネーターに対する誤解	40
事例 17：活動のフォローアップ	42
事例 18：社会人になっても、活動を続ける	44
事例 19：学生が運営にかかわる	46
事例 20：学生の世代交代	48
◎「まとめ編」	51
プロセスにおけるコーディネーターの役割と機能	52
【寄稿】学生と地域との連携に不可欠なボランティアコーディネーション力	54
【資料編】全国の大学ボランティアセンター一覧	58
関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会の主な実績	62

## はじめに

2015年、関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会は、スタートから10年を迎えました。2005年、関西の各大学でボランティア活動を支援する部署の担当者が集まり情報交換会をスタートさせ、2009年4月より現在の協議会スタイルとなりました。2015年度は、大学ボランティアセンターを中心に12の団体が加入しています。

協議会では、各大学におけるノウハウの交換や情報共有を通じて大学ボランティアセンターのあり方を検討しています。また、大学ボランティアコーディネーターの専門性向上とセンターの存在価値を高めるため、各大学における実践事例の検討や共有にも取り組んでいます。

この冊子は、各大学においてボランティア活動支援、ボランティアコーディネーションに取り組んできた担当者のノウハウを集約したものです。各大学で取り組んでいる地域連携の現場から寄せられた実践事例をもとに、協議会で議論を重ね、整理しました。大学と地域の接点において頻発する「対応困難な事例」に対し、それぞれのケースへの対応を提案しています。ゆえに、想定される読者対象はボランティアコーディネーターなどの専門職に限定されるものではなく、地域と連携した「学び」を設計する教員、地域社会と協働する部署の担当者、ひいては大学との協働を検討している地域団体にとっても、示唆が深いものとなっています。

本事業は、経験値にもとづく実践事例を広く提供することにより、地域連携に類する取り組みの持続的、継続的な展開や、今後の各大学における実践の質の向上に資することを目的としています。各大学におかれましては、本冊子を積極的にご活用いただければ幸いです。

なお、本冊子は、公益財団法人大阪コミュニティ財団／大阪信用金庫ふれあいスマイル基金による2015年度助成事業により作成いたしました。また、作成にあたってご協力いただきました各大学の方々、関係者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

2016年1月31日

関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会

# この冊子の使い方

本冊子は、一つの事例につき、2 ページの構成となっています。  
各項目で記載されている内容については、下記の解説をご覧ください。

事例をイメージしやすいように、対話形式のストーリー仕立てになっています。

事例の背景にある、それぞれの思いを「ホンネ」として記載しています。

事例 04：ボランティアに対する誤解

## ボランティアは「何でも屋」?

今日は地域の草刈りに学生ボランティアが参加することになりました。学生たちは一生懸命、もくもくと草を刈ります。休憩時間に、住民の一人が「いいこと」を思いついたようです。



そや。君ら若いんやし、パソコン得意やる？うちの活動のホームページ、ちょっとつくってや。

…気軽に言うけど、けっこう手間かかるんですよ。それにボランティアは「何でも屋」とは違うんですけど。



学生たちは引き受けざるをえませんでした。草刈りも終わり、活動も終了です。解散のあと、地域住民の話す声が聞こえてきました。



いつもやったら、来てくれはった人らに御礼やらせなあかんけど、ボランティアやと安くあがってええわ

…ぼくたちだって、交通費も食費もかかっているんですけど…



### 地域のホンネ

ボランティアって、タダで何でもお手伝いしてくれるのと違うの？だから、いつも大学に「集めてくれ」とお願いしてるんよ。それに、学生なんやから、パソコンやらも得意やろうし、ちょっとお願いいただけなんやけどなあ。



### 学生のホンネ

ぼくたちは、地域の方々と交流しながら、活動のお手伝いをしようと考えていたのです。何でもお願いされても困ります。ボランティアだってお金と時間がかかるんですから、「タダ働き」扱いはしないでほしいのです。



12

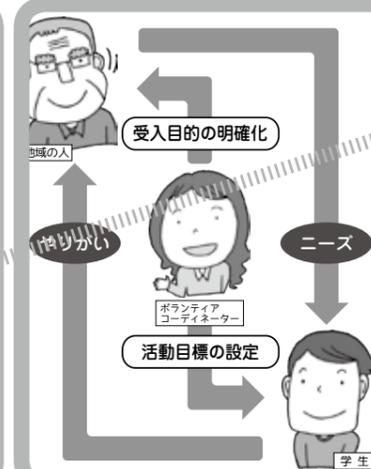


## 事前の調整で、活動に関する「思い」を共有しよう

地域が学生のボランティアを求める動機はさまざまです。学生の教育や地域活動参加へのきっかけとして受け入れている場合もありますし、単なるただ働きのような感覚で受け入れをしている場合もあります。また、ボランティア活動を誤解されている可能性もあります。

コーディネーターは、事前に活動内容について受入側と調整し、ボランティアを受け入れる「ねらい」について確認しておくことが重要です。

一方で、学生もまた多様な動機で活動を希望しています。活動に「何を求めるのか」「何ができるのか」を明確にし、目標を設定する手助けをしたうえで活動に送り出すことが大切です。活動内容とその社会的意義を伝え、自己の目標を明確化することは、授業や就職活動の一環としても、役に立つものになります。



### キーワード「ボランティアの三原則」

- 「自発性」・・・他人から強制されたりせず、自らの意志で取り組む行為である。
- 「社会性」・・・自分のためだけでなく、社会や他者のためになされる行為である。
- 「無償性」・・・見返りや報酬を主たる目的にしない行為である。

### <練習問題>

「何でもいいからボランティアがしたいです」という学生に対して、どのようにアドバイスができるでしょうか？

事例の問題提供に対する答えを掲載しています。

困難事例が発生するメカニズムと、事態を解決に導くためのアプローチについて解説しています。

解決のためのアプローチについて、図式化しています。

事例に関連するテーマおよび、事例の理解の促進につながるキーワードを掲載しています。

上述のアプローチを応用して考えるテーマを記載しています。

13

# 準備編

## 最近の学生はボランティアに興味ない？

大学近くの商店街が活性化のためのイベントを企画しています。この商店街では、地域のさまざまな団体を巻き込み、地域のつながりを深めていくことも目指しています。しかし、どうも学生ボランティアの集まりが悪いようで、大学のボランティアセンターに相談がありました。



児童館のスタッフ

今年も、小学生たちの夏休みの川遊びキャンプが近づいてきたなー。でも、ここ数年、学生ボランティアが全然集まらない。自分の学生時代は、すぐ集まったのになー。

川遊びのボランティア募集チラシが届いたけど、今年も7月下旬の開催かー。面白い活動だけど、テストの直前の時期だなー。



ボランティアコーディネーター

一応、学生たちに呼びかけてみましたが、やはりテスト勉強もあり、集まらず・・・



今年も参加はなさそうですか。夏休みもたくさんあるはずなのに。イマドキの学生はボランティアに興味ないのかな・・・

興味はあると思うのですが、ちょうどテスト前で。それにキャンプ場までの交通費の負担も厳しいみたいでして。



### 地域のホンネ

テスト勉強ってそんなに大変かなー。それより、このボランティア活動で得られるものはいっぱいあるのに。交通費だって、飲み会やライブに行くお金があるなら出せるでしょ。

### コーディネーターのホンネ

テスト勉強を差し置いて、参加してね、とは言えないし、せめて8月にズラしてくれたら。それに、学生の力が必要なら、交通費だけは、主催者で何とか負担できないのかな。



## まずはイマドキの学生の姿を知ってもらおう

地域の方々には、案外、最近の学生の生活実態やボランティア活動に何を期待しているのかをご存知ありません。それゆえ、学生が参加しづらい時期や内容でのボランティア活動の依頼もしばしば寄せられます。こうした状況を改善するためには、まずは学生の実態をきちんと知ってもらうことが大切です。学生の生活実態はここ10年あまりで大きく変化しています。

学 業	成績評価は出席回数や期間中の小テストを重視するため、出席率が高い。
アルバイト	7割がアルバイトを行っている。アルバイト代は、生活費や学費にあてる学生が増加。
就 職 活 動	就職に有利になるインターンシップには積極的に参加。就職活動スタートが3年生の12月に。それ以降は、「就職活動」中心の生活となり、精神的な状況も左右される。
経 済 面	仕送りが減り、生活維持のためにアルバイトをする学生が増加。
将 来	将来についての最大の不安は「就職・進路」のこと。また、就職に関わるコミュニケーション能力に不安を抱いている学生も多い。

特に経済や雇用環境の変化により、アルバイト時間の増大や就職活動の長期化を促し、自由時間が少なくなっています。そこで、忙しい学生たちがいつなら活動に参加しやすいかを、地域の皆さんに示すことも有効でしょう。

### <活動時期を考えるヒント>

- ・試験(テスト)期間(前期:7月後半~8月前半、後期:1月後半~2月前半)は、活動が難しい。
- ・長期休暇(夏休み・春休み)、下宿生は、帰省する人が多いので、大学のある街にいない。
- ・長期休暇(夏休み・春休み)の予定は、早めに検討をはじめるので、早めの告知が大事。
- ・3年生の冬からは、多くの学生は、就職活動が第一優先になる。
- ・就職活動が終了した学生(就職先が決まった学生)は、時間に余裕がある。

こうした実態がわかれば、学生ボランティア募集する側も、学生の生活や関心にあったボランティア活動プログラムが企画できるはずですよ。



### キーワード 「つながりやすくなるよう自ら仕掛ける！」

ボランティアセンターは、地域のボランティア活動ニーズと学生とをつなげる役割ですが、つながりにくいものをつなげることは困難です。ですから、お互いがつながりやすくなるよう自ら仕掛けていくことが大切です。

### <練習問題>

ある高齢者施設から、来春のお花見の際に外出の付き添いとして学生ボランティアを募集したいと相談がありました。あなたは施設の方にどのようにアドバイスしますか？

## ボランティアセンターは人材派遣会社？

大学には「ボランティアセンター」という地域のニーズを何でも引き受ける窓口があるらしい、という情報を得て、さっそく町内会の方がやってきました。



地域の人

今度、うちの町内会でお祭りをするんや。〇〇大学は同じ地域にあるし、ボランティアとかで地域に協力するべき。だから、学生ボランティアをたくさん集めてくれへんか。

地域のことを大事に思う気持ちは、大学も学生も持っていると思うけど、強制することはできないんですよ。



ボランティアコーディネーター

とりあえず、学生たちに声をかけたところ、「行きたい」という学生が4人手を挙げてくれたので、町内会に連絡を入れました。ところが・・・



なんや、たった4人か…。500人は参加するイベントなんやから、最低でも20人は集めてくれないと困るんや。

できるかぎり協力はしたいですが、「行かせる」ことはできないし、勝手に人数を決められても…。



### 地域のホンネ

大学は、地域にいろいろと迷惑をかけてるし、もっと地域のことを大切に考えて地域貢献するべきでは？ 地域のニーズにこたえるんやろう？ こっちがボランティアを20人欲しい、とお願してるんやから、何としても集めるべきだと思うんやけど。



### コーディネーターのホンネ

地域のお世話になっていることは間違いないけど、学生のことも考えてほしいな。この活動は何のためのもの？ どうして、学生に来てほしいのか？ ボランティアとして募集するなら、ちゃんと説明をして、学生が納得して活動できるように配慮してほしいな。



## 「斡旋」ではなく「仲介」で双方向の関係性をつくろう

大学ボランティアセンターというと、「学生のボランティアを斡旋してくれるところ」と思われがちです。しかし、大学ボランティアセンターは、「地域と学生（大学）の間の橋渡し」をするところです。つまり、地域の要請に応じてボランティアを「動員」するというより、地域のニーズを学生に伝え、学生のやる気を高め、活動につないでいくという「仲介」としての機能が強い、といえます。

また、地域と学生が良好な関係を築くためには、ボランティア活動をする人と、ボランティアを求めている人の温度差をなくすよう、ともに努力をしていかなければいけません。大学ボランティアセンターは、地域と学生が歩み寄り、お互いの考えの違いを乗り越えるためのお手伝いをします。両者が歩み寄るための中継点、それが大学ボランティアセンターなのです。

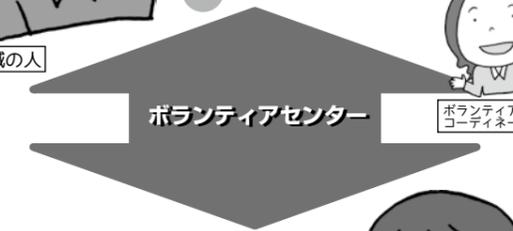


地域の人

若者への期待。地域課題に対する閉塞感。地域は君たち若い力を待っているんだ。もっと活躍してほしい！！



ボランティアコーディネーター



社会的な課題を体験したい。社会のために自分ができることを知りたい。



学生



### キーワード 「ボランティアセンターは中継ポイント！」

ボランティアセンターは、ただ単に情報を流すだけでなく、募集されている活動が学生にとってどのような意義があるのかを考察したり、よりよい活動になるよう団体に助言したりすることで、より充実した活動につながります。

### <練習問題>

地域のお祭りに大学のサークルが招かれることになりました。しかし、学生はいろいろと忙しく、「連絡も途絶えがちで困っているんだけど」と、地域の人から相談が入りました。そんなとき、あなたならどうしますか？

# 人が集まらない！ どうしよう？

大学近くの商店街が活性化のためのイベントを企画しています。この商店街では、地域のさまざまな団体を巻き込み、地域のつながりを深めていくことも目指しています。しかし、どうも学生ボランティアの集まりが悪いようで、大学のボランティアセンターに相談がありました。



地域の商店街の組合長

今度、うちの商店街で夏祭りやるんやけど、地域が一体となって盛り上がるお祭りになりたいんや。でも、学生さんのボランティアが集まらへん。どうしたらいいんやろう？

うーん、いきなり募集しても難しいんじゃないかな。学生はまず商店街のことを知らないし、地域にどんな魅力があるか、商店街にどんなお店があるのかわからないから、なかなか参加しにくいかも…。



ボランティアコーディネーター

組合長と相談した結果、まずは商店街のことを知ってもらおうと、組合のみんなに協力してもらって、「商店街のうまいもん巡りツアー」を行うことにしました。



商店街ってスーパーと違って、買ったものを使った料理を教えてください、一人暮らしやから小分けのパックにしてくれたり、買い物しやすい！！  
でも、商店街もだんだん店を閉めるところが増えてきて、お客さんも減っているらしいね…。僕たちもお手伝いしたいなあ！



学生

## 地域のホンネ

今は商店街も地域や大学を巻き込んで、活性化に貢献しないとあかん時代やけど、商店街の人間だけでは考えも偏ってしまう。学生さんが参加してくれたら若い人のかかわりも増えるし、企画のヒントももらえて地域が元気になるわ。



## 学生のホンネ

商店街って入りにくいと思っていたけど、スーパーでの買い物と違って、お店の人とのやりとりができるのがおもしろかった。ここでは地域の人も巻き込んで色々なイベントをしているという話も聞いたし、僕たちも参加してみようかな。



# 「導入プログラム」で出合いを演出しよう

地域の方々が学生に対して持っているイメージと学生が地域に対して持っているイメージ、そのずれは時にさまざまな「誤解」を生じさせます。

地域の方々の中には「大学生は暇だ」、「若い人はコンピュータに強い」と思い込んでいる人は少なからずいますし、逆に大学生の中には「大学のまわりなんて、何もない」、「お年寄りばかりで古臭い」と決めつけている声が聞かれることもあります。しかし、それは本当に正しいのでしょうか？ 社会一般に流布されているイメージによって、お互いに関わりあう前から、偏見や先入観を強く持ってしまうことがあります。

これらの偏見や先入観を取り除き、お互いがうまく歩み寄ることを目的とした「導入プログラム」を企画し実施するのも、コーディネーターの腕の見せ所です。例えば、地域と協働して、「地域探検ツアー」を開催したり、地域の人と「交流会」を開いたり、地域の商業者を巻き込んで「暮らし方のコツ講座」を催すなど、一見、ボランティアとは関係のないように見える活動をボランティアプログラムの過程の一つとして取り入れる方法があります。



## ボランティア活動



### キーワード「ないなら、つくる」

ボランティアクーリエーターは、既存の社会資源を組み合わせることで地域社会の課題解決に取り組みますが、どうしても社会資源や機能が「ない」ということがあります。その場合、新たな社会資源の創出や担い手の育成を視野に入れるという「ないなら、つくる」という積極的な役割も求められます。

### <練習問題>

大学周辺の地域から学生の通学マナーについて苦情が絶えません。学生には教職員がしつこく注意していますが、なかなか効果は出ていないようです。コーディネーション役を担う者としてどのような対応ができるでしょう。

## ボランティアは「何でも屋」？

今日は地域の草刈りに学生ボランティアが参加することになりました。学生たちは一生懸命、もくもくと草を刈ります。休憩時間に、住民の一人が「いいこと」を思いついたようです。



地域の人

そや。君ら若いんやし、パソコン得意やろ？  
うちの活動のホームページ、ちょっとつくってや。

…気軽に言うけど、けっこう手間かかるんですよ。それにボランティアは「何でも屋」とは違うんですけど。



学生

学生たちは引き受けざるをえませんでした。草刈りも終わり、活動も終了です。解散のあと、地域住民の話す声が聞こえてきました。



### 地域のホンネ

ボランティアって、タダで何でもお手伝いしてくれるのと違うの？ だから、いつも大学に「集めてくれ」いうてお願いしてるんよね。それに、学生なんやから、パソコンやらも得意やろうし、ちょっとお願いしただけなんやけどなあ。



いつもやったら、来てくれはった人らに御礼やらせなあかんねんけど、ボランティアやと安くあがってええわ

…ぼくたちだって、交通費も食費もかかってるんですけど…



### 学生のホンネ

ぼくたちは、地域の方々と交流しながら、活動のお手伝いをしようと考えていたのです。何でもお願いされても困ります。ボランティアだってお金と時間がかかるんですから、「タダ働き」扱いはしないでほしいのです。

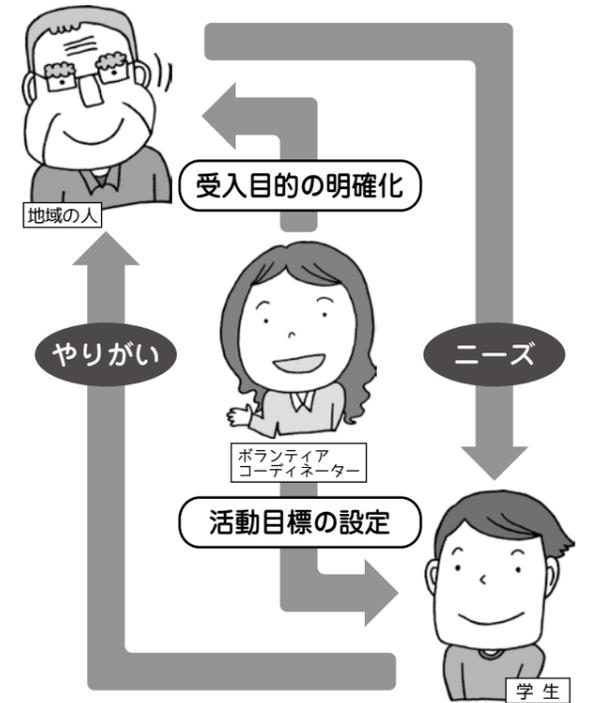


## 事前の調整で、活動に関する「思い」を共有しよう

地域が学生のボランティアを求める動機はさまざまです。学生の教育や地域活動参加へのきっかけとして受け入れている場合もありますし、単なるただ働きのような感覚で受け入れをしている場合もあります。また、ボランティア活動を誤解されている可能性もあります。

コーディネーターは、事前に活動内容について受入側と調整し、ボランティアを受け入れる「ねらい」について確認しておくことが重要です。

一方で、学生もまた多様な動機で活動を希望しています。活動に「何を求めるのか」「何ができるのか」を明確にし、目標を設定する手助けをしたうえで活動に送り出すことが大切です。活動内容とその社会的意義を伝え、自己の目標を明確化することは、授業や就職活動の一環としても、役に立つものになります。



### キーワード「ボランティアの三原則」

- 「自発性」・・・他人から強制されたりせず、自らの意志で取り組む行為である。
- 「社会性」・・・自分のためだけでなく、社会や他者のためになされる行為である。
- 「無償性」・・・見返りや報酬を主たる目的にしない行為である。

### <練習問題>

「何でもいいからボランティアがしたいです」という学生に対して、どのようにアドバイスができるでしょうか？

## 学生を受け入れる合意は取れていますか？

小学校での地域のお祭りに、PTAのボランティア担当であるAさんから、ブース運営を学生に手伝ってほしいと依頼がありました。大学ボランティアセンターで募集したところ、5人の学生が申し込んでくれました。ところが…、



自治会役員の人

あれ？ あんたたち何しに来たの？ 学生が手伝いにくるなんて聞いてないけど…。いま忙しいから、そこで待機してくれるかしら…。

君たち、やることがないなら、テントを立てるのを手伝ってよ。そのあと、長机を体育館から30台、運んでくれるかな。



青年団の人

学生たちは戸惑いながらも、言われるままに体力仕事に精を出しました。でも、聞いていたこと(ブース運営)と内容が違うので、不本意な気持ちはありました。そして活動後…



PTA 会長

ごめんなさいね、ちょっと他を回らなきゃならなくて遅くなったの。学生が来ることはボランティア担当のAさんから聞いているわ。でもAさん、急用ができて今日は来られないのよ。それで、Aさんから何を頼まれていたんだっけ？

………



学生

### 地域のホンネ

今年から始まった地域行事なので、確かにゆとりはなかったわ。けれど、小学校PTA、自治会、商店街などが実行委員となり、忙しい中で子どもたちや街のために力をあわせて当日を迎えたのよね。会議では決めることが多くて、学生ボランティアさんのことまで話し合う時間がなくて…。でも若いんだから身体を動かさなきゃ。



### 学生のホンネ

大学のボランティアコーディネーターから地域参加の心構えや「指示待ちではなく積極的に！」と指導を受けて、それなりの気持ちをもって参加したんだ。でも、当日、小学校に行っても誰も私たちのことを気にしてくれる人がなくて、どうしたらよいかわからなかった。いきなり5人だけで長机30台はきつかった。なんだか疲労だけが残った感じ。お祭りは盛況だったけど孤独感があった。



## 学生の持ち味をつなげるために、地域と対話を

「地域に若い力を！」という思いは、地域、学生、大学等の立場を超えた共通の願いです。ですが、実現するにはとてもハードルが高い。本事例は「当日、参加したが、誰も学生のことを認識していなかった」という状況ですが、実際にあり得ることです。「当日だけのお手伝い」は地域側にとっては限定された参加ではありますが、学生にとっては、勇気を出して地域にかかわろうとした一歩かもしれません。貴重な出会いを次につなげるためには、さまざまな参加のあり方を認め、受け入れるためのボランティアマネジメントの発想が有効です。

事前にコーディネーターができることは、上記の認識をもって地域の方々と対話することです。忙しい実行委員会であっても地域と学生の幸せな協働を達成するために言いにくいことも伝えていきましょう。事前説明会やオリエンテーションの実施をお願いすることもひとつの方策です。

### お祭り実行委員(地域)



#### 会議での合意

#### 担当者が責任を

#### オリエンテーション

#### 学生への声かけ

#### 地域と学生の 幸せな協働

### 地域活性化

こちらもボランティアで運営が大変！

#### 地域の方々の間にもギャップが！

- ・準備不足
- ・参加への温度差
- ・当日ボランティアとは？
- ・学生の力をいかに…

一緒に頑張りましょう！



ボランティア  
コーディネーター



### キーワード「ボランティアマネジメント」

ボランティアマネジメントとは、ボランティアが自分の持ち味を発揮して組織の中で生きいきと活動することができるための考え方とその手法や手続きのことを言います。ボランティアの捉え方やオリエンテーションの仕方、フォローアップの仕方など、知っておくと役立つことがたくさんあります。活動の結果として、ボランティアが地域づくりに貢献でき、可能性を広げる存在となることができるよう働きかけます。

#### <練習問題>

「やることがなかったから」と活動を無断で早退した学生ボランティアがいました。学生に対して、地域に対して、どのようなアプローチが必要でしょうか。

## 持ち込まれた企画、何が求められているの？

大学近隣の自治会から、「地域活性化にぜひ学生の力を貸してほしい」と大学ボランティアセンターの学生スタッフに相談がありました。自治会のイベントまではわずか1か月半です。



自治会役員の人

学生が来てくれたら賑わうし、ぜひ大勢で来てほしいんですよ。「遊びコーナー」の企画は全面的にお任せしますし、何でもいから子どもたちが喜びそうなことを考えてほしいんです。

うーん、けっこう難しい依頼だなあ。簡単に言われるけど、新生が入ってきたばかり。あと1か月半で、企画をして、ボランティアを募集して、役割分担をして…大丈夫かな？



大学ボランティアセンターの学生スタッフ

学生スタッフは、準備期間の短さに不安を抱えつつも、「子ども対象なら、初心者でも気軽に楽しめそうだから」と考え、引き受けることにしました。しかし、よく話を聞くと…



子どもの遊び相手に学生は絶対必要な存在なんです。役員の高齢化もあるし、学生さんに来てもらうとほんとに助かります。毎年来てもらっているし、あてにしていますよ！ そうそう、ボランティアさんなんだけど、会場の受付やアナウンスもお願いしたいから、できれば30人ぐらい来てほしいです。

えっ！30人ですか！実行委員会への案内はないし、イベントの全体像や、趣旨目的は見えにくいし、30人はちょっと難しいんじゃないかなあ。しかも、今回は引き受けたけど、毎年引き受けられるかはわからないよ。期待も大きすぎるし、学生に頼りすぎてるような気がして、「重い」なあ。



### 地域のホンネ

地域の中の大学として、学生はどんどん地域貢献してほしいですね。地域の大人と接することで社会勉強にもなるでしょう。商店街のイベントには、学生の力は絶対必要なんですよ。とりあえず当日大勢で来て盛り上げてもらわないと、成り立たないんです。



### 学生スタッフのホンネ

サラッと簡単をお願いされることが多いけど、よくよく話を聞いたら、けっこう難しいお願いになってしまうことも、よくあるんだよね。学生の力を高く評価してくれることはうれしいんだけど、あんまり過大な期待をされると応えられるかどうか不安になっちゃうし、正直、ボランティアに頼り過ぎじゃないかな、とも思う。

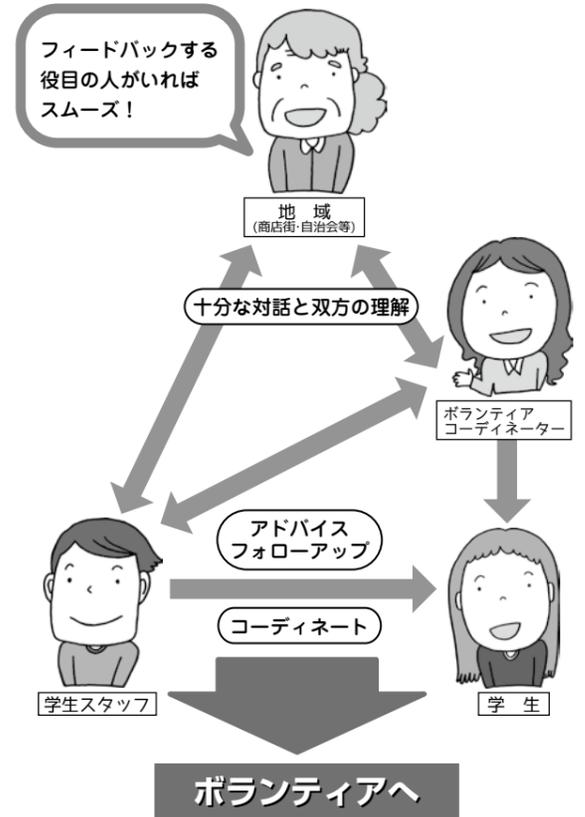


## 双方のニーズが共有できるように、翻訳してみよう

大学ボランティアセンターでは、コーディネーターではなく「学生スタッフ」が窓口となって地域からのニーズを受け付け、プログラム化まで担うことがあります。教育的効果をふまえ、学生もセンターの運営に参加するのです。

その場合、「なぜ、どんな目的で実施するのか」という趣旨目的を十分に確認しないまま、ニーズに応えようと動き始めてしまうことがあります。地域のニーズや期待と、学生の思いを共有することが前提ですが、時として誤解をはらんだまま、時間だけが過ぎていくことがあります。

そうならないよう、コーディネーターは、「通訳」の役割を担います。可能であれば、活動が計画される前に地域へ出向き、ニーズの把握につとめます。そして、地域の方々の思いや期待を確認し、学生が関わる意義を伺います。そのうえで、企画内容について学生スタッフとともに検討・調整する場と時間を設定し、活動がよりよいものになるよう双方に働きかけ、いつでも相談ができる関係性をつくります。また、準備期間が短すぎて学生に負担がかかる企画や、すべて丸投げの企画、学生の安心・安全が確保できない企画については、その旨を説明し、理解と納得をいただいた上でお断りするという判断を下す「安全弁」としての役割も求められます。



### キーワード「学生が関わる意義」

コーディネーターは、日頃から地域のニーズを把握するために自ら地域に出向いて課題を把握し、「学生がボランティアとして関わる意義」や、「ボランティア活動を通して地域の課題を解決するにはどんな企画が有効か」を考えておく必要があります。地域と学生の双方が、活動の目的と意義について考えてもらうことが重要なのです。

課題を解決する主体はあくまでも地域、それに、新しい付加価値を生み出すのが学生の役割です。

### <練習問題>

商店街から持ち込まれた企画を「見える化」してみよう！ 課題解決の主人公は誰？ 地域貢献って何？ 主訴は何？ それらを企画書に落とし込んでみて、何が問題かチェックし、提案できるプログラムを考えてみよう。

## ボランティアに保険は必要か？

大学に、野外活動キャンプのスタッフ募集の依頼がありました。子どもが好き、自然が好き、アウトドアが好きな学生に、仲間になってほしい！という呼び掛けです。



野外活動に  
取り組む地域の人

自治会の子もたちを連れてディキャンプに行きたい。  
学生の手伝いを募集してほしい。  
学生ボランティアの募集は初めてで…。  
とにかく、楽しく交流しながら…。

持参された募集チラシを見ながら、活動の詳細、条件、交通費補助の有無を確認していきました。



…集合場所までの交通費は自己負担で、バスと一緒にキャンプ場まで行くのですね。  
参加費は食費だけ自己負担と…。  
えっと、保険はどうなりますか。

え？保険ですか？…まあディキャンプですし、危険なこともないので、必要ないと思っているのですが…必要ですかね？



ボランティア  
コーディネーター

### 地域のホンネ

宿泊キャンプなら保険に加入するけれど、今回は日帰りだからなあ。いままでの経験から怪我など何かあることはまずないし、安全なプログラムだから、必要ないと思うんだけど。学校って、結構、ハードルが高い感じ…。



### コーディネーターのホンネ

野外活動って、結構リスクが高い活動だと思うんだけど、そうでなくても、万が一のことを考えて団体として保険は入っておくべきでは？  
団体に対応をしないなら、保険に自分で入るよう学生に伝えないとイケない。  
そもそも、保険の必要性を感じておられないようだけど、学生をつないで大丈夫かな…。



## 保険を利用することを強くお勧めします。

ボランティア活動に伴うさまざまなリスクについて、学生、受け入れる（募集する）団体、送り出す大学の間で、対策への問題意識を共有する必要があります。

万が一の怪我（最悪の事態として死亡事故、後遺症が残る怪我もあり得ます）に、誰が責任を負うのか、明確にする必要があります。保険料を誰が負担するべきかについては、その都度、活動の趣旨に即して判断します。特に「学生ボランティアの自己責任」とするのかどうかは、よく検討しておきましょう。大学では授業（正課）、クラブ活動（正課外活動）の保険加入を学生に義務付けていることが多いです。では、大学が案内し、参加をサポートするボランティア活動の場合はどうなのでしょう。

事前にボランティアセンターから募集団体に保険の加入状況を確認し、募集時に学生に知らせ、必要に応じて保険加入を勧めることが一般的です。ボランティア保険は地域の社会福祉協議会が加入の窓口となっています。ボランティア活動を行う個人や団体向けのもの、行事を主催するボランティア団体向けのもの、天災補償のあるものなど、さまざまな保険があります。調べてみてください。



### キーワード「リスクマネジメント」

最悪の事態も想定して備える、それがリスクマネジメントという考え方です。ボランティアの事故は学生の自己責任なのか、送り出す大学の責任なのか、事前の備えをどこまでするか、日頃から検討しておく必要があります。

### <練習問題>

学生が長期の海外ボランティアに参加したいと相談に来ました。リスクマネジメントについて、どのように対応しますか。

# お金の切れ目が縁の切れ目??

子ども会でキャンプをするので学生に手伝ってほしい、という依頼がありました。募集案内の下の方には小さな文字で、「※ただし、集合地までの交通費とキャンプ中の食事代、保険代は『実費負担』です」という記載がありました。学生は深く考えず説明会に行ったのですが…。



子ども会の人

えー、ボランティアのみなさんには、活動にかかる実費として、8,000 円を負担してもらいます。

えっ！ボランティアなのに、8,000 円も自己負担するんですか？



学生

ボランティアは「無償」やけど、活動にはお金がかかるでしょう？うちは予算もないし、自分の食事の分くらいは自分で負担するのが当然だと思うのよね。

活動は全部「無料」だと思ってた。全部、団体が出してくれるとは限らないのか…。



## 地域のホンネ

ボランティアさんが手伝ってくれるのは、本当にありがたいわ。だけど、ボランティアの経費まで全部団体が負担するのは無理よ。案内にも書いたけど、ある程度の「実費」はボランティアさんにも負担してもらいたいと思っているの。



## 学生のホンネ

まさか、ボランティアとして参加しているのにお金がかかるなんて、考えもしなかったよ。確かに「やりたくてやってる」活動なんだけど、ぼくたちお金がないし、ボランティアとして貢献するんだから、受入団体が全部出すのが当然だと思うんだけど。



# お互いの負担について、理解と納得を促進しよう

ボランティアは、活動の対価として金銭的報酬を求めない、という「無償性」を重視します。しかし、無償の活動だからといってボランティアは全て「無料」なのか、というと、必ずしもそうとは限りません。事業を運営する上で、どうしてもボランティアにも多少の負担を求めるケースは多くあります。

もちろん、負担が少ないほうが多くの参加は見込めるのですが、そのために事業の継続に支障をきたしてしまうようでは元も子もありません。活動にかかる費用を誰がどのように負担するのかということは、それぞれが活動の中で決めていけばよいのです。

しかし、その場合の負担については、双方の合意形成が重要となります。可能な限り、募集の段階で、「いくら負担してもらうのか」「そのお金は何に使われるのか」を明示したうえで理解を深め、お互いが納得いく内容となるよう対話する過程が求められます。

大学ボランティアセンターは、大学に寄せられた情報をそのまま発信するのではなく、ボランティアにも負担が発生することが想定されるケースについては、必要に応じて条件を確認し、双方の合意形成を促進する役割を担います。活動につながる負担が残りすぎると、どちらか一方だけに負担感が残るようなコーディネートにならないよう注意しましょう。



## キーワード「多角的に物事を捉え共に考えましょう。」

ボランティア受け入れ団体、学生、地域の三者の関係性を重層的に捉え、事前に掛かる経費については充分調整します。活動に経済的支援が必要であれば、大学、行政、企業などの助成についても検討します。この時、コーディネーターだけでなく、ボランティアの受け入れ団体自身も、必要に応じて資金面について一緒に検討いただく場合があることを伝え、より実りが多い活動となるよう心がけましょう。

## <練習問題>

「今どきの学生はお金を出さないと来ないよ。お金さえ出せば、こっちの言うことも聞いてくれるしね」。こんな考えの団体から依頼が来たらどう対応しますか？

## 就活のためのボランティア？



就職支援課職員

就職活動の際、自己アピールできるものがあるのはとても大切です。ボランティア活動やインターンシップ等に参加して自分の得意なことを見つけましょう。

なるほど、もうすぐ就活も始まるし、部活やサークルも入っていないし、そろそろ何か始めなきゃいけない…。ボランティアなら簡単に始められそうだし、面接でボランティアをしたと言ったら受けもよさそうだし！



学生

就活支援講座で話を聞いた学生は、ボランティアを探すため大学ボランティアセンターを訪れました。



ボランティアコーディネーター

もうすぐ就活なので、すぐに始められるボランティアはありませんか？

すぐにかあ、どんなボランティアをしてみたいの？



コーディネーターは、学生との会話の中で就職希望先や彼自身が興味、関心のあることを聞き取りながら、直近で募集を行っているボランティア活動を紹介することにしました。



この前のボランティアはどうでしたか？

始めは就活のためと思って参加しましたが、私が今まで知らなかった地域が抱える課題を知り、自分に何ができるのかすごく考えさせられました。就活のためになるかは分かりませんが、次の活動にも参加したいです。



### コーディネーターのホンネ

ボランティアを始める動機は、学生それぞれ違います。大学ボランティアセンターでは、就活のためにという学生さんも少なくはありません。しかし、動機は何であれ、活動に参加しようと思ってくれたその時が、私たちにとってのチャンスだと思っています。



### 学生のホンネ

就活に役に立つって言われたからボランティアに参加したけれど、就活に関係なく今回の活動にはとても惹かれるものがありました。少し動機は不純だったかなと思うけど、自分の将来について深く考えるきっかけになりました。就職についても改めて考えることができました。



## 入口(きっかけ)は様々、出口(目的)はひとつ

ボランティアに参加するきっかけや動機は、学生それぞれ違います。友だちに誘われたから(友だちとの交友関係を良好に保つために)、就活のために、単位のためにといった外的報酬を得ることを目的とした「外発的動機づけ」による場合もあれば、活動が楽しいから、人と関わるのが好きだからといった自らの満足感や達成感を求める「内発的動機づけ」による場合もあります。就職活動のためにという動機は外発的動機づけによるものではありませんが、ボランティアが必要とされている社会背景や課題を理解し、ボランティアの目的や自らの役割を見つけることができれば、それは内発的動機づけによるボランティア活動へ結びつくきっかけとなります。

ボランティア活動は、自由意志に基づく自主的な活動であり、それは何らかの内発的動機づけから起こされる活動です。「誰かのために何かしなくちゃ!」、学生たちのライフステージの中で、いつかそう思い行動を起こすきっかけを作ることが大学ボランティアセンターやコーディネーターの役割でもあります。

### 内発的動機



学生

人との関わり  
やりがい

### 外発的動機



学生

就職  
単位

**サポート**

**活動開始時**

- 学生のボランティア参加動機を確認。

**活動継続時**

- ボランティアを続ける理由ややりがいを聞き、学生にフィードバックを行う。



ボランティアコーディネーター



### キーワード 「内発的動機づけ」「外発的動機づけ」

外発的動機づけによる行動は外的報酬を得ることを目的としているため継続が難しく、報酬を得られないと創意工夫や積極性の質やレベルが下がるが、内発的動機づけもよる行動は行動自体が目的であり、行動を達成するための創意工夫や積極性が高くなると言われています。学習効果を高める、活動の質を高めるという点でも、外発的動機づけから内発的動機づけへの変換が必要となります。

### <練習問題>

友達同士誘い合ってボランティア活動に参加した学生3人、当日の朝になって1人が体調不良で休むとの連絡の後、他の学生からも次々と連絡があり、結局3人とも活動には来ませんでした。コーディネーターとして事前にどのような働きかけが必要だったのでしょうか？

# 実践編

## やる気が出ないのはなぜ？

サークルの活動として、大学近くの地域で住民の方々と一緒に、定期的に清掃活動を行うことになりました。代表の学生は、はりきってサークルメンバーに声をかけ、当日を迎えました。



地域の人

若い人がたくさん来てくれるのは嬉しいけど、何やダラダラ歩いているヤツもいて、やる気があるのかなのか…。

先輩に言われて来たけど、地域の人とは何を話したらいいかわからないし、ただゴミを拾うだけで何の意味があるんだろう。



サークルメンバー

代表の学生は、地域での打ち合わせに毎回参加し、地域に根差した活動の意義を見出していました。住民に喜んでもらおうと、メンバーに積極的に声をかけ、当日人数が集まったことで満足していました。



サークル代表

代表の学生とは細かく打ち合わせをして内容を決めたり、期待してたんやけどなあ。こっちが言わないと学生が動かないのは、困るわ。

メンバー全員の意識を高めるのは難しいけど、幹部メンバーでは共有できているし、一生懸命さは伝わってるはず。

### 地域のホンネ

学生が来てくれるのは、歓迎。若い力でワイワイと盛り上げてほしい。学生さんにいろんな新しいアイデアを出してもらって、活気のある活動にしたい。そして、やるからには、積極的に動いてほしい。



### 学生のホンネ

せつかくなら大学のある地域で何か役に立つことをしたい。でもメンバー全員の理解を得るのは、正直難しい。当日来てくれるだけでも良しとするしか…。



### 学生のホンネ

サークルメンバーで何かやるのは楽しい。でも、あまり知らない人と話すのは苦手だし、指示がないと何をすればいいのかわからない。



## 問いを深めることで、学生の課題解決を支援

ボランティア活動に取り組むサークルは、しばしば地域と協働して活動することがあります。地域貢献したい、自分たちの力で地域を盛り上げていきたいなど、熱い思いを持って活動に取り組みますが、時に地域との間で行き違いが生じることがあります。その原因の1つに、サークル全体での活動目的や想い、情報の共有不足など、サークル運営がうまくいっていないことが挙げられます。そんなとき、それらの課題を解決する手助けをする役割がコーディネーターには求められます。

サークル活動は学生主体の活動であるため、学生が主体となって問題解決にあたることが大切です。ですが、学生だけでは行き詰まってしまうこともあります。ときには、地域の方の声を代弁する役割を担うなどしながら、解決への糸口を見つける手助け役として関わることも必要となります。

また、相談を持ち掛けられるよう、普段からサークルとの関係性を構築しておくことも大切です。



### 活動の改善



サークルメンバー



ボランティアコーディネーター



サークル代表

実行する

改善案を考える

課題に気づく

根本原因を探る

問題の洗い出し



### キーワード「客観性」「中立性」

物事を中心にいるからこそ、自分たちの課題に気づき解決策を考えることが難しいということがあります。そんなときは、第三者的立場からの問いかけが、そのサークルの問題点やその原因を整理する手助けとなります。そこから学生達自身で課題を見出し、解決策を考える道筋を立てることへとつながっていきます。

### <練習問題>

サークルから必要なときに相談を持ちかけてもらえるようにするには、普段からどうすればよいでしょうか？

# ボランティアは「仕事」ではない？

夏祭りのボランティアを依頼した団体の代表が、一見、元気で人当たりのいい学生と打ち合わせをしています。最初はやる気満々だったのですが、このところ、反応も悪く、どうも元気がないようにみえます。

**地域団体の代表**  
前をお願いしてた夏祭りのボランティアなんだけど、ちょっと他にも手伝ってほしいことがあるんだ。それも、お願いしていいかな？ 時間的にキツイとは思うけど、よろしく頼むわ！

**学生**  
えー、またお願いかよ…。バイトでもないのに、なんでそこまでしないといけないのかな。めんどくさくなってきた…。 **ホンネ**

**地域団体の代表**  
あ、はい…。大丈夫です。 **タテマエ**

**地域団体の代表**  
ありがとう！ 助かるわ。じゃあ、明日はよろしく！

**学生**  
行きたくないなあ。だけど、直前になって「欠席します」とかいったら怒られるやらなあ。連絡したくないなあ…。もう、ドタキャンしちゃおう！ **ホンネ**

**地域団体の代表**  
あの子が来ない！ 連絡もないし、どうしたんだろう。まさか当日に来ないなんて… どうしよう？

**学生**  
あ、はい…。大丈夫です。

## 地域のホンネ

あれだけ「やる」って意気込んでくれてたんだから、てっきりやる気があって協力してくれてるとばかり思っていた。しんどいならしんどい、と言ってくれば別のボランティアに依頼したのに…。学生はマナーがなっていないなあ。

## 学生のホンネ

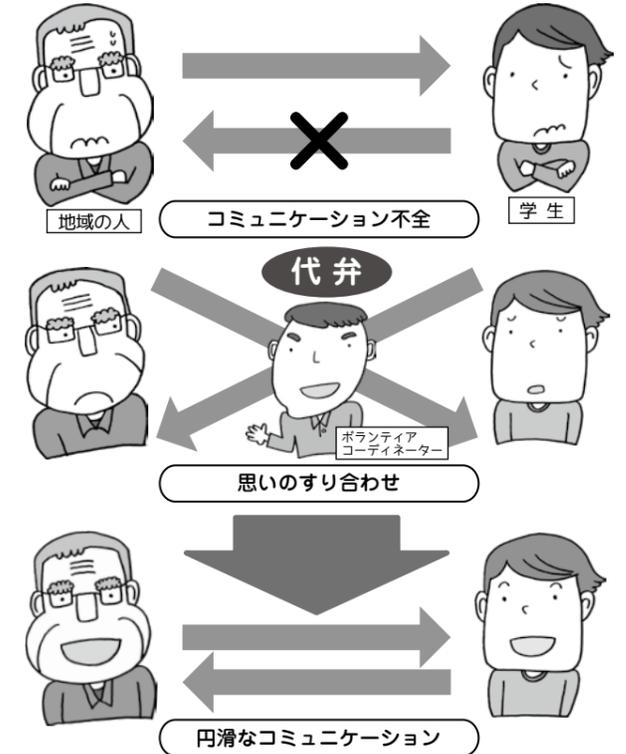
最初はやる気があったんだけど、次から次へとお願いされたら、何だかやる気がなくなっちゃった。ドタキャンして、正解やったわ！ まあ、ボランティアだから、やりたくないときはやらなくていいんじゃないかな。

# 自由と責任のバランスを問いかけ、成長を促そう

ボランティアは、あくまでも自発的な活動です。しかし、活動の受入先からすれば「作業を手伝ってくれる要員」であることには間違いありません。そのため、地域と学生の間で「責任」についての解釈にずれが生じることがあります。

地域の人からすれば、「ボランティアでもこのくらいはしてもらわない」という考えがあっても、学生にとっては「重責だ」という場合があります。また、過大なお願いであっても、学生からは断りづらい、言い出せない、ということもあります。そのため、大学ボランティアセンターでは双方の思いを汲み取り、フォローしていく必要があります。

しかし、いくらボランティアが「自発性」を重んじているとしても、「約束を破る」など、社会的責任を放棄することが許されるものではありません。ボランティアといえども、責任感を持って活動に取り組むことは重要です。そのことを学生に「気づいてもらう」ことも、大学ボランティアセンターの大きな役割の一つであるとも言えます。大学ボランティアセンターは、活動を通じて得られる「気づき」を促すことで、学生の成長につながるという視点も求められます。



## キーワード「自発性は揮発性」

地域からニーズをもちかけられ、勢いよく始まった活動も、時間が経てばマンネリ化し、少しずつやる気が失われていく…。市民活動の「自発性」は、ともすればあっという間に気化してしまうという「揮発性」を併せもちます。そうした初志をいかにつないでいくか、ボランティアコーディネーターは、ボランティアのやる気を変化することをふまえた上で、それを高めるための働きかけします。

## <練習問題>

ボランティアの受け入れ団体から大学に、「学生ボランティアのマナーがなってない」との苦情があった場合、どうしますか？

## 意外に大きいメディアの違い

大学ボランティアセンターのプログラムに参加したのがきっかけとなり、その後も参加学生の数名が継続して地域に関わるようになりました。今回は地域のお祭り企画の一部を学生たちが中心となって受け入れ団体と企画することになっていますが、受け入れ団体と学生が登録しているメーリングリストには何も発信がありません。



地域の人

活動に来たときは、地域のことを考えてくれているし、やる気もとてもあったと思うけど、ちゃんと動いてくれているのかしら。

メーリングリストはなんとなく発信しづらいし、電話も緊張するなあ。とりあえずメンバーとは Facebook(\*1) や LINE(\*2) で連絡取り合ってるし、企画をちゃんと練り上げてから連絡したらいいや！



学生

その後も催促の連絡をしましたが学生からの音沙汰がなく、お祭りの1週間前になってやっと連絡がつかしました。その内容は1週間に関係者と調整するのは難しく、結局、学生たちが考えた企画のアイデアは2割程度しか実現しませんでした。



### 地域のホンネ

こちらから何度も連絡をしないといけないのかしら。かといって、SNS や LINE は使いにくいわからにくいわ。“みんな”で考えたいけど、どうしたらいいのかしら。



(\*1) ソーシャル・ネットワーキング・サービスの1つ。  
(\*2) 無料通話メールアプリのこと。  
(\*3) 複数のメンバーに、名前をつけて登録したものを「グループ」と呼び、同じグループに参加するメンバー同士で連絡を取り合うことができるようになる。

もっと事前にわかっていたら、きっと実現した企画なのに、なぜ連絡をくれなかったの…？直接会って話すか、もっとメーリングリストを活用してほしいわ。

そんなこと言われても、パソコン苦手だし、メールって頻繁に使わないのに。地域に行くにもお金がかかるしなあ…。



### 学生のホンネ

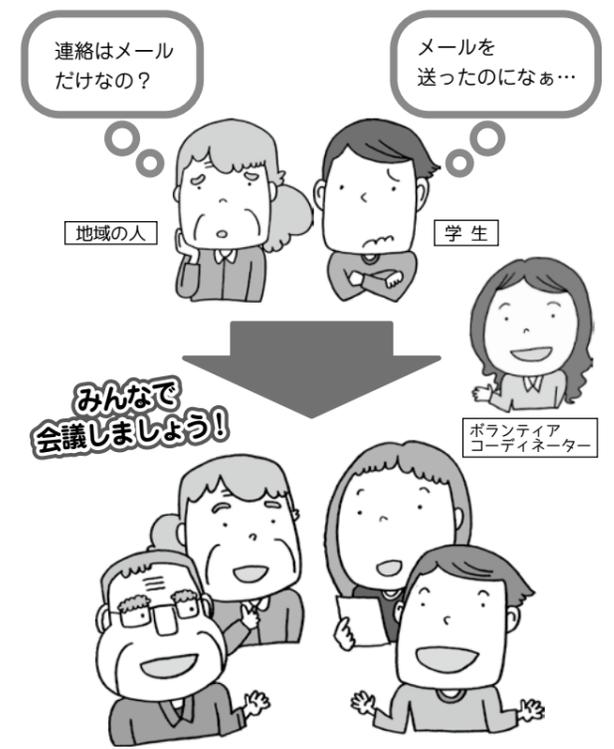
そんなに状況を知りたかったら SNS や LINE グループ(\*3) に入ってくれたらいいのに。せっかく“みんな”で考えた企画だったのに…。



## メディアに頼り切らず、対話の場を作ろう

より良い関係を築きながら活動を継続していくには、相手の立場を想像し考えながらコミュニケーションを取ることが大事です。様々なコミュニケーションツールがある中で、使いやすさや使い方は人それぞれ違います。当事者間でお互いに連絡が取りやすい、使いやすいコミュニケーションツールは何か、事前に一緒に考えてみる機会をつくるのも、コーディネーターの役割の1つです。

また、学生が地域で活動を継続するにあたって、どちらか一方だけで完結しないよう気をつけなければなりません。先ほどの事例でいうと、“みんな”とは誰のことを指すのか、時にコーディネーターから問いかけて、より良い活動が継続できるよう手助けをする役割を求められます。地域の方々へは、例えば、学生が試験期間中で連絡しづらい状況など事情を伝えつつも、学生に遠慮せずに連絡してもらえよう促しや後押しをすることで、コミュニケーションが円滑になるきっかけを作ったり、場合によっては双方の代弁者となって間をつなぐことも大事です。



### キーワード「コミュニケーションは相手が完結させる」

コミュニケーションとは二人以上の間で行うものですが、一方が何らかのメッセージを発して完了ではなく、発せられたメッセージを受けとめた相手が完結させるものだと言われています。「伝えつつも」ではなく、相手に「どう伝わった」が大切です。

### <練習問題>

地域のお祭り企画を考えている学生から、「地域の人からもらったメールの意図がわからない」と相談を受けました。見せてもらうと、長文で持って回った言い回しが多く、確かに意図がわかりません。さて、どう対応しますか？

# 男らしさ、女らしさを発揮しろ!?

友達2人で小学生の野外活動をサポートするボランティア活動に参加しました。女子学生のほうは元気いっぱいですが、男子学生は足を痛めているようです。



地域の人

さて、昼食も終わって子どもたちは自由時間だ。今のうちに、もう使わない荷物は車に運んでしまおう。Aくんも手伝ってくれ。それと、おやつを作らんと。Bさんはそっちをお願い。

あ、はい。えーっと、でも、今日は足を痛めてるし、できればあまり動かなくて済むお菓子作りのほうがいいんですけど…。

私も実家暮らしでほとんど料理したことないし、お菓子作りも全然自信ないんですけど…。

うーん、そうか。じゃあAくんには無理させられないし、しばらく子どもを見守りながら休んでおいてくれ。Bさんはそんなことじゃ嫁の貰い手がないぞ。この機会に花嫁修業がんばろう。



学生 A



学生 B

## 地域のホンネ

力仕事が男の見せ場やで。少しぐらいの怪我が何や。わしも包帯巻いて米俵をかついだもんだ。女に力仕事はかわいそうだし、料理の1つもできないと本人が困るやろ。今の若い人たちは、男らしさ、女らしさが欠けてるし、この活動を通じて育ててやろう。



## 学生のホンネ

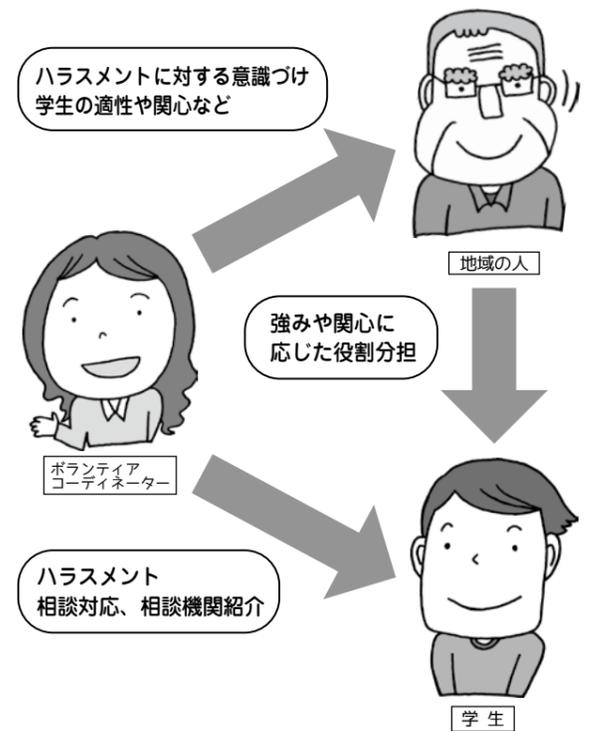
「男だから」「女だから」の決めつけは嫌だな。それに「嫁の貰い手がない」なんてセクハラじゃない？ でも、地域の人も悪気があるわけじゃないってわかってるから、面と向かって「それよりこっちをしたい」とはとても言えないしな…。



# "性別"分業より"やる気"分業!さりげないフォローを。

男女差別の気持ちはなくても、向き不向きを考えて、「男子は運搬作業、女子は調理ね」とやってしまいがちです。これは、ボランティア活動の場面でもよく見られます。単純に男女で役割を分けるのではなく、個々の学生の強みや関心に応じて役割を選べると嬉しいもの。活動に参加する学生の特性がわかっている場合は、先にお伝えしておくのがいいでしょう。関係者の中に性別役割意識が強そうな人の存在を感じたら、さりげなく価値観が多様化していることを伝えましょう。「最近は男も料理ができないと困るようですし、元気な女子も多いです」というように、雑談に交えながら一般論として話す受けてもらいやすいです。

また、地域の人言葉に人知れず傷ついている学生がいるかもしれません。そのことに想像力を働かせ、できる限りフォローしましょう。学内や地域のハラスメント相談窓口も伝えておけば、知り合いのコーディネーターには話しにくいことも相談できるかもしれません。



## キーワード「ボランティア」(主意主義)

人間のもつ理性や知識よりも、意志を重視する立場のこと。制度や慣習を超えて自発的に行動する、自由な精神を表す。

### <練習問題>

地域の伝統的なお祭りを学生さんにも手伝ってほしいと、地域から依頼されました。お話を聞くと男女で明確に役割が分けられています。「申し訳ないけれど、これは神事だから女性を表舞台に上げることはできない」とのこと。あなたはどうか対処しますか。

# 先生、これって「学び」ですか？

大学で水質調査について研究している教員がボランティアセンターに来室しました。何でも、ゼミの学生が研究成果を実践できるフィールドを探している、とのこと。「学生たちはやる気あるから」ということ、教員が活動の面倒を見る、ということだったので、ボランティアセンターは日ごろからつながりのある地域に学生の受け入れをお願いするかたちで、活動先の紹介のみを行いました。ところが…。

**教員** きみたちには、あくまでも授業ではなく、「ボランティア」として地域に関わってほしいんだ。わかる？

**ボランティアコーディネーター** えー、授業の課題でもないのに、これ以上時間をとられるのはちょっと困るなあ。でも、断れないし…。

**学生 A** よくわからんけど、きみたちは何しにきてるのかな？ やる気のある子とそうでない子がいるみたいやけど。

**地域の人** 先生！やる気のない人たちがいるせいで、叱られました…。

**学生 B** いい経験をしているじゃないか。そういう時にどうするか、きみたちで考えるのが、「学び」になるんだよ。

## 地域のホンネ

やる気があるボランティアが来てくれる、って聞いてたのに。ゼミでも、やる気のある子をつないでもらわないと困るなあ。

## 教員のホンネ

学生はトラブルからも、さまざまな気づきを得るんだよ。だから、学生の自主性に任せるよ。

## 学生のホンネ

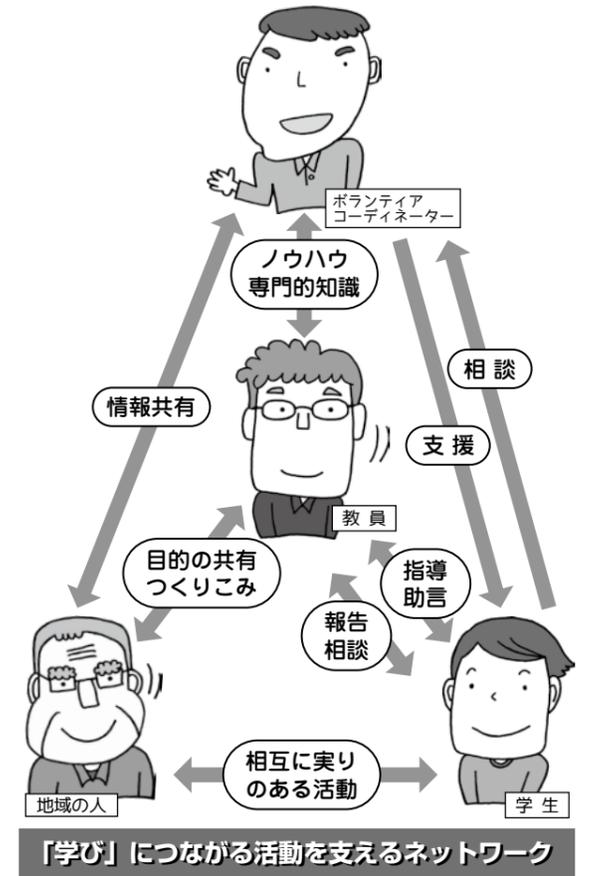
先生に言われたから、仕方なく行ってるだけ。やる気のある子は好きにしたいけど。しかも怒られるし、災難だよ。

# 4つの「し」で、豊かな実践と「学び」を！

教員が授業での「学び」を応用するかたちで地域社会での活動を促すことが増えています。しかし、学生が半ば強制的に「させられている」感覚をもったまま地域で活動し、トラブルにつながる場合があります。そして、そうした状況を学生たちが解決することの教育的効果をねらった教員のスタンスが、地域、学生双方に不信感を与えてしまうこともあります。

ボランティアの教育的効果は、地域社会との協働のもとに作り込まれたプログラムの中で高められます。その実現のためには、事前に担当教員と地域が協議し、地域にとっての活動の意義と学生が獲得しうる「学び」の双方について共有する「しこみ（仕込み）」が重要となります。また、事前学習や活動ステージに合わせた「学び」の機会の提供、相談体制の整備といった「しくみ（仕組み）」も不可欠です。同時に、学生が葛藤したり、協働を促したりするような活動の機会設定などの「しかけ（仕掛け）」、そして、ふりかえりや活動への相互評価を行う「しあげ（仕上げ）」の過程も求められます。これらの4つの「し」を踏まえて、学生は経験を「学び」へと昇華させていくことができるのです。

このような科目の設計や学生への指導・助言は、原則として教員が担うべきものですが、コーディネーターは必要に応じて、教員との間で地域と関わるためのルールやノウハウを共有します。また、場合によっては、教員と連携しながら学生の相談にのるなどのサポートも行います。



## キーワード「サービラーニング」

サービラーニングは、学生が地域貢献活動を通じて「学び」を深める経験型学習の一つです。地域・学生の相互に価値ある関係性と事前学習・事後学習（ふりかえり）を重視しています。

## <練習問題>

ゼミ活動の一環として地域に関わっている学生が無断欠席することについて、地域から大学ボランティアセンターに相談があった場合、どのように対応しますか。

# サポートが必要な状態の学生を、どう送り出すか？

大学ボランティアセンターに、「ボランティアしたい」と一人の学生が相談に来ました。緊張した面持ちで、ぼつりぼつりと話をします。動機を尋ねると、「大学が面白くないから」と答えました。どうやら、キャンパスで孤立している学生ようです。

**ボランティアコーディネーター**

人間関係が苦手で学生相談室にお世話になっています。家族からボランティア活動でもしてみたらと勧められました。

**学生**

どんな活動がしたいの？

……。子ども相手とか……。

不登校の子どもの支援をしているボランティアの依頼はあるけれど最低でも週1日のペースでの継続的な活動になるよ。

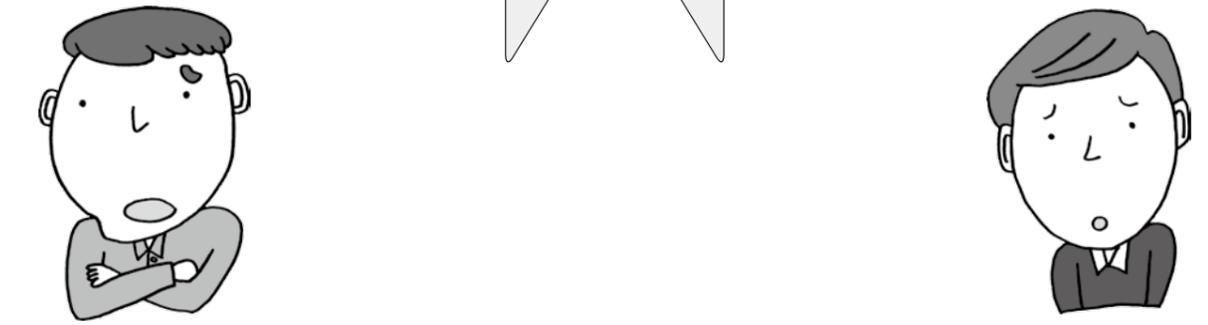
それ興味あります、参加するにはどうしたらいいですか？

**コーディネーターのホンネ**

う～ん、正直、この学生を活動につなぐことはためらうなあ。気持ちはわかるし、応援したいけど、受け入れていただけるかどうか…。

**学生のホンネ**

このまま大学生活を終えたくない、僕でも受け入れてもらえるような場所をみつきたい。子どもは好きだし、学校の先生になってもみたいなあ…。



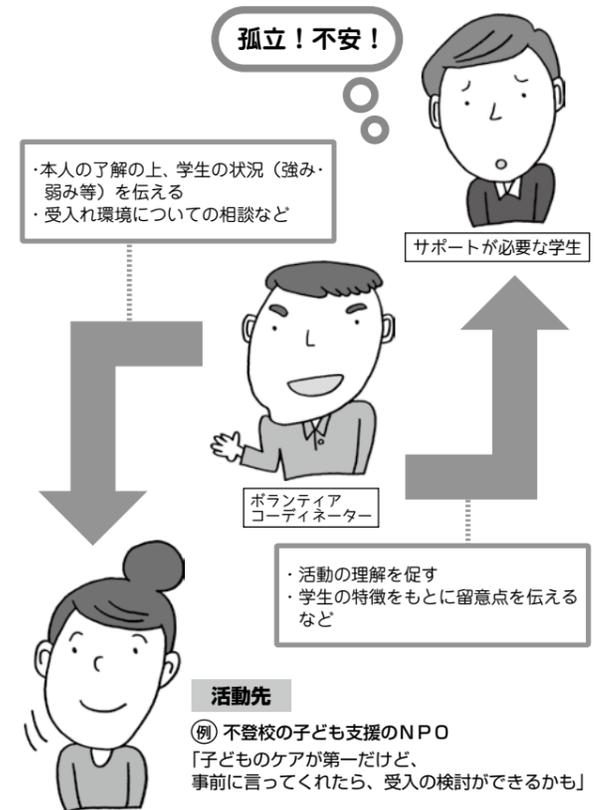
# 必要なサポートがあれば、活動の機会を作ることは十分できる

大学ボランティアセンターとしては、孤立した学生の社会参加のきっかけを支援したいと考えているところ。しかし、ボランティア活動の第一の目的は「活動への貢献」ですので、今回のケースのように、「サポート」が必要と思われる学生をつなぐ場合は、事前の配慮が必要です。

たとえば、学生自身に活動の理解を促す、また本人に理解を得て受入先に学生の状況を伝え、受け入れの相談を十分にしておく、といったことが求められるでしょう。また、何らかの課題を抱えている当事者だからこそ、悩みが理解しやすかったり、同じ目線で話し合えたりできることもあります。学生が同じ課題を抱えることを強みにできるような寄り添いがコーディネーターには求められます。

さらに、必要なサポートがあれば活動の機会をつくることは十分可能であることを伝えながら、大学の学生相談室や担当教員など、必要に応じて他の部署とも連携しましょう。

「社会性を身に付けるために、ボランティアでもしてみたら」と学生が安易なアドバイスを受ける例が、後を絶ちません。このような事例を見かけたら、ボランティア活動の理念を大学に浸透させるためにも、理解を促せるよう働きかけましょう。



**キーワード「当事者だからこそ」**

ボランティア活動では、当事者だからこそ、持てる視点や姿勢があると言われていきます。助ける、助けられるという一方の関係だけでなく、苦しみや辛さを知っているからこそ、分かち合える力強い関係性とも言えます。偏見の目を持たず、学生の可能性、活動現場の可能性を信じるという姿勢が大切です。

**<練習問題>**

車椅子を利用する学生が、東北ボランティアのバスツアーに参加したいと相談がありました。さて、あなたならどうしますか。

# 展開編

# コーディネーターは現場監督！？

コーディネーターが地域でのボランティア活動現場に学生を引率することになりました。学生と地域住民がやりとりしながら活動に取り組み、コーディネーターはその様子を見守っています…。里山での下草刈りや間伐など、活動はなかなかハードなようです。



ボランティア  
コーディネーター

活動が大変なのはわかるけど、両者間でコミュニケーションがとれてないかな…。ふりかえりのときに確認しよう。



地域の人

学生の動き、まとまり悪いなあ…。引率の人にあとで言うておこう。



学生

コーディネーターさん、見てるなら手伝ってくれたらいいのに…。

**地域のホンネ**  
学生の動きが悪いなあ。引率の人は見てるだけじゃなく、しっかり監督してくれないと。責任者なんだから…。

**学生のホンネ**  
せっかく一緒に来てるんだから、コーディネーター（引率の人）ももっと積極的にかかわってくれたらいいのに…



# コーディネーターとしての立場を明確にして伝えよう！

活動を引率するコーディネーターは、活動者ではありません。また、中学や高校でのクラブ顧問のような責任者という立場でもありません。コーディネーターは、学生の体験・変化を間近で感じ取るために、地域（活動現場）についてよりよく理解するために引率することもあります。あくまでも活動の主役は学生です。

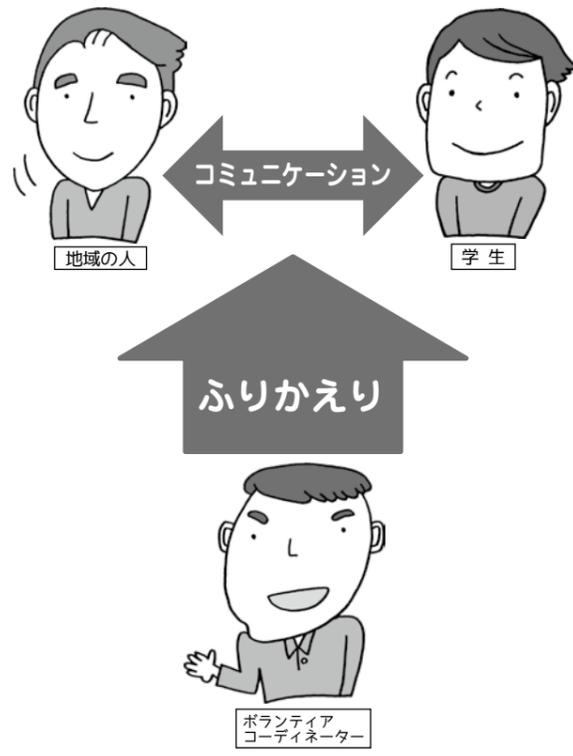
- ・地域住民は、何か思うことがあれば学生に伝える。
- ・学生は主体的に活動にかかわる。

地域と学生、両者間で豊かなコミュニケーションを取りながら活動することが大切です。

ただ、ハードな活動内容や活動環境からコミュニケーションがとれないこともありますので、そのような時に両者の橋渡しをするのがコーディネーターの役割です。

また、活動後にふりかえりの機会を設けられたら、その際にはコーディネーターも参加して、活動の様子を見る中で気づいたことなどを共有することができます。

重要なのは、このような引率者としてのかかわり方を、事前のオリエンテーションなどで地域と学生にきちんと伝えておくことです。



**キーワード「引率者は黒子」**

ボランティア活動の主役は学生と地域住民であり、活動引率者としてのコーディネーターは、その活動がより充実したものになるよう働きかける裏方的存在。時には学生が不慣れなこともあるかも知れませんが、試行錯誤しながら地域住民と対話を重ねていくことに大きな意義があります。活動の様子を見る中で気づいたことがあれば、学生に、また地域住民に還元し、より良い活動が実施されていくよう応援しましょう。

**<練習問題>**  
大学から災害ボランティアバスを出すことになり、引率者として同行することになりました。事前オリエンテーションで、あなたの役割をどう説明しますか？

# 膨らむ要望、どこまで応える？

児童擁護施設からの要望で、1ヶ月前にイベントで子どもたちと遊ぶボランティアに参加した心理学専攻の学生。受入団体に連絡先を伝えたため、学生に直接連絡がきたようです。



施設職員

先日は、ボランティアに来てくれてありがとう。うちの団体では、虐待を受けた子どもの様子を見るために、プレイルームで1対1で関わっているんだけど、ちょっと手伝ってくれへんかな？この前の活動の時に、カウンセラーを目指しているって聞いたことを思い出して、ぜひやってもらいたいと思ったんだよ。

簡単に言うけど、まだ1回生だし専門知識とか経験とかないんだけど…。どうやって関わればいいのかわからないし、不安だなあ。



学生

学生は、不安を抱えつつ、直接頼まれたこともあり引き受けざるを得ませんでした。簡単な活動説明はあったものの、後は行って見てわからなかったら聞いてと言われ…



どうして活動の報告をしてくれへんの？子どもたちとどんな話をしているか私たちは知りたいのに。子どもにとって必要な支援についても聞きたいし…

本当は活動の内容を話したいけど、自分の体験について話してくれる子どもたちの話をどこまで詳細に報告してもよいか迷うなあ。でも、全部自分が抱え込むのもしんどくなってきたし、次の活動行くの嫌だなあ。



## 地域のホンネ

学生ボランティアは、大学で学んだ知識を生かして活動に参加してくれるんじゃないの？福祉分野や教員を目指す学生もいるし、しっかり勉強してるやんね？ そんな学生が関わってくれて助かってるんやけど、最近報告がないし、連絡も取れなくなって困るわあ。



## 学生のホンネ

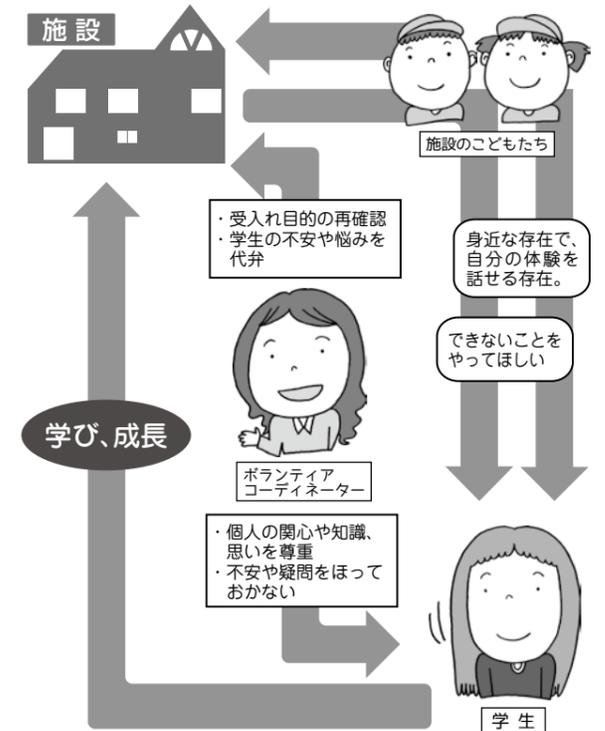
私は、楽しみながら自分のできる形でボランティアがしたいと思って、子どもたちと遊ぶ活動に参加したのに…十分な専門知識や経験のないまま、虐待を受けた子どもたちと1対1で関わったり、支援を続ける自信がないわ。かといって断りづらいし、メールの返信もしたくなくなってきた。



# いつでも相談できる環境を整えよう！

ボランティア活動の現場では、活動が継続・発展してくるにつれ、双方のニーズ（求めていること）が変化してきます。コーディネーターは、活動開始時のみならず、活動が経過してからも適宜フォローアップのための面談やボランティア活動内容の見直しなどを行い、お互いが必要としていることを見極めることが大切です。

例えば、活動開始後時間が経過すると、学生は施設の膨らむ要望に不安や悩みを抱えたり、施設は学生の活動態度について疑問を持つことがあります。しかし、受け入れ先と学生との関係やお互いの遠慮から、直接話し合う場が持たず、誤解や距離が生じてしまうことがあります。コーディネーターは、活動中も施設および学生がいつでも相談できる環境をつくり、場合によっては双方の代弁者となって間をつなぐ役割を求められます。



## キーワード 「ニーズを見極める」

コーディネーターは、双方のニーズを充たせた時に、ボランティアと施設との関係はより生産的なものになるということを理解した上で、施設の抱える課題をボランティア活動を通して解決するために、それぞれのニーズを見極め、施設と学生をつなげることが重要です。

### <練習問題>

多くのボランティアが参加する市民イベントに参加した学生に、ボランティア活動の意義を見出してもらうために工夫できることは何でしょうか？

## 大学卒業＝ボランティア卒業なのか!?

学生は、1年生の頃からずっと児童福祉施設で子どもとかかわるボランティア活動に参加していました。4年生になり、もうすぐ卒業を控えています。卒業後は、引き続き大学周辺の地域に住みながら就職をする予定です。



施設職員

4年間、ずっとボランティアに来てくれたね。子どもたちの成長にも一緒に寄り添ってくれて、本当に感謝しているよ。

こちらとしても、本当に良い時間を過ごすことができました。みなさんは家族みたいなものです。

また、いつでも施設に遊びに来てくれたらうれしいです。

もう、卒業なので関われませんが、お元気で…。



卒業をひかえた学生



### 地域のホンネ

今後もかかわり続けてくれたらうれしいけど、学生じゃないからボランティアしてもらうのは無理だろうなあ…



### 学生のホンネ

学生時代のボランティア経験は貴重だった。もう取り組むことはないだろうけど、いつまでも忘れないようにしたいな。



## 学生時代のボランティア経験は、将来の市民活動のきっかけ

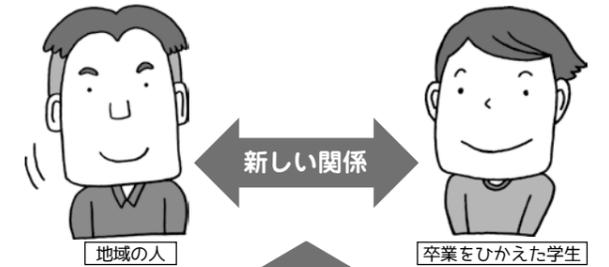
卒業を契機にボランティア活動を辞める人もいますが、終了と決めつける必要はありません。地域と学生（社会人）、お互いの意思を確認した上で、新しい関係を構築するチャンスでもあります。

社会人になると生活環境が変わるため、学生の頃とは関わり方が変化する部分もあるでしょう。OB・OGの立場を生かし、学生の相談役になったり、自身の体験談を伝えたりする役割を担ってもらうことも期待できます。社会人の方が担いやすい責任（車の運転等）もあるかも知れません。また、社会人として、仕事以外のコミュニティと接点を持つことは生活を豊かにすることにもつながります。

コーディネーターは、社会のあり方や実践モデルを提示したりするなどして、今後の関わり方について考えることを促します。

もし学生が卒業後に大学周辺を離れてしまう場合も、新しい居住地の社会福祉協議会（ボランティアセンター）、自治体広報誌等から情報を得られることを伝え、新しい地域での活動の始め方を示します。

コーディネーターは、学生の卒業後は直接的に関与することは難しいですが、学生の市民社会への旅立ちがより良いものになるよう後押しします。



社会のあり方やモデルの提示



ボランティアコーディネーター



### キーワード「市民ボランティア／社会人ボランティア」

ボランティア活動に参加しているのは、学生ばかりではありません。社会人、仕事をリタイアした方、いろんな立場の人がそれぞれの経験や思いなど力を合わせて、まちをより良くするための活動をしています。

### <練習問題>

卒業を控えている学生から「社会人になってからもボランティア活動に参加したい」との相談がありました。どのように声かけや情報提供をしますか？

# 学生も運営メンバーになってほしい

ゼミの先生の紹介で、3ヶ月前、町内秋祭りに11人の学生が参加しました。その後も、月1回の清掃活動や防犯パトロールなどに参加する学生もいます。今日の清掃活動参加者は2人でした。

**地域の人** おつかれさま。あんたらが来てくれて本当にありがたいわ。ところでお願いやけど、イベントだけでなく運営委員会にも参加してもらえんかな？

**学生** いや・・・ええと・・・それは・・・ちょっと無理

**地域の人** 今からみんなで飲みに行くし、そこで詳しいこと話すわ。

**学生** すいません、明日の授業準備があるので今日は失礼します。

**地域の人** えっ、授業なんか出てるんや。まあええわ。ほな、いま聞くけど、この会になんか意見ある？

**学生** .....  
特に.....

## 地域のホンネ

学生に運営委員になってもらったら、ワシらでは出てこんような斬新なアイデアを出してもらえるやろうし、学生は時間があるから雑用は任せられるわな。年寄りばかりより体裁工工し。うちでいろんな経験して成長してくれたら嬉しいなあ。

## 学生のホンネ

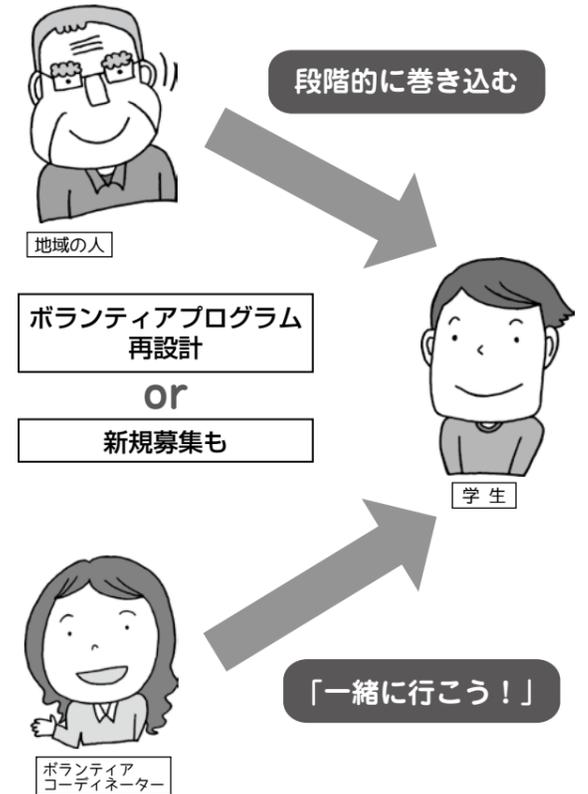
忙しいのに、会議にも参加してとか言われても困ります。普段はできない面白い体験がいろいろできるから活動しているだけで、地域活性化とかあんまり興味ないし。もっとこうしたらいいと思うこともあるけど、あの人たちの前じゃ、とても言えないです。

# 時には積極的に背中を押そう！

単発のイベント参加と、運営メンバーとして長期的に活動することは、学生にとってまったく別モノです。地域の方々の希望が単発から継続的な関わりに変化してきた場合は、ボランティアプログラムを作り直し、新規募集も含めて再検討しましょう。

単発の活動であれば、「人手がほしい地域」と「ちょっと体験してみたい学生」というように、たまたま両者の利害関係が一致して活動につながることもあります。でも、本当の意味で地域と学生が共に活動していくためには、お互いの強み・弱み・ニーズなどを理解し、感情や夢を分かち合っている共感の関係をつくる必要があります。組織が魅力的になるほど、さらに人が集まるようになります。

ボランティアコーディネーターは地域の人に対して、細かい参加のステップが必要な学生もいること、具体的な参加の仕方を学生に説明する必要性を伝えるなどの関わりをします。一方、学生には、一緒に地域の交流会に参加して地域の人との橋渡しをしたり、参加を迷っている学生には、時に積極的に誘ったりして背中を押すことがあっても良いかもしれません。逆に、断れなくて困っている学生には、お互いがホンネを言えるような環境を整えたり、建設的な話し合いになるよう進行したりする役割が求められることもあるでしょう。



## キーワード「協働の前に、共感」

地域と学生、大学と行政など、セクターを超えて協働する場合に、いきなり「どうやって進めましょうか？」と話し始めてしまいがちです。でも、立場が違えば想いも違うことが多い。協働の具体的な話をする前に、関係者の共感を作ることを心がけましょう。

### <練習問題>

地域は継続的な関わりを求めているが、学生が単発イベントへの参加しか興味がない場合、どのように対応すればいいでしょうか？

# 学生の世代交代にどう備える？

学生はわずか数年間でどんどん世代交代してしまいます。せっかく意義のある活動を立ち上げて、その設立メンバーが卒業してしまうとその後1、2年で立ち消えてしまうことも少なくありません。また、就職活動や海外留学、実習などの都合もあり一人の学生が活動に参加できる期間は予想以上に短いです。にも関わらず、学生自身には培ってきたノウハウを次の世代に継承するという意識が薄いのが現状です。



地域の人

せっかく一緒に活動を行ってきたのに、4年生が卒業するとともに学生が一人もいなくなってしまうんです。

あらら… 学生にその実情を尋ねてみると、

残念だけど、活動を停止します。初期メンバーの先輩方がもう卒業しちゃったんですよ。今まで頑張ってきたけど私たちも就職活動なんかで忙しくて…



先輩学生 A

去年担当していた先輩が引退しちゃったんで、そのボランティア活動、どんなふうに進めたらいいのかよくわからないんですよ。



後輩学生

ボランティア活動を続けたいけど、部活が厳しくてほとんど休めないし、留学したいのでバイトも外せないし、授業も詰まってる後期からは時間がないんですよ。



先輩学生 B

## 地域のホンネ

せっかく学生さんと一緒に活動を続けてこられて、団体メンバーもみんな喜んでくれていたんだけどなあ。やっぱり、若い人はあんまりあてにできないな。

## 学生のホンネ

地域の方にはほんと、心苦しいんですが、大学時代にやりたいことややらなきゃいけないことが色々あって、何年も続けるのはちょっとね。それに立ち上げメンバーの先輩たちが卒業しちゃったんで、今までみたいにグイグイ引っ張ってくれる人もいないし。

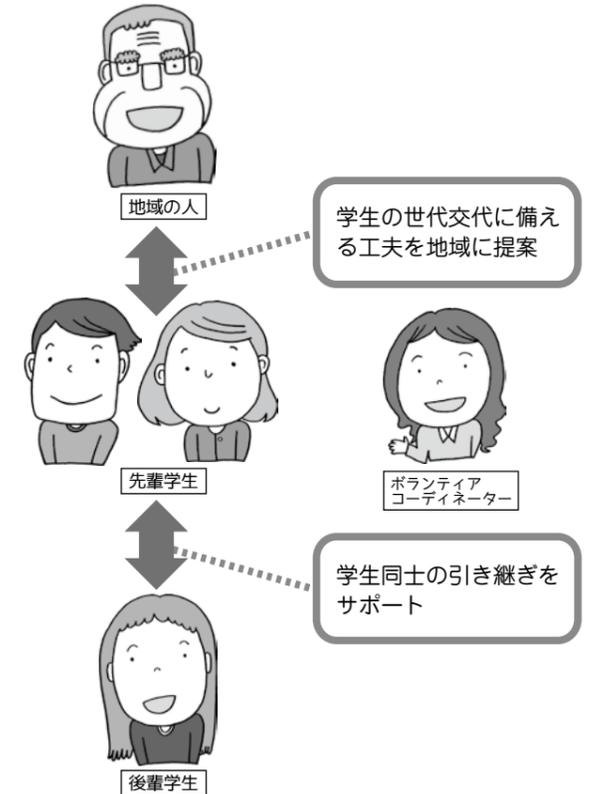


# まずは活動の意義を再確認！そして次の世代につなぐ工夫を

まずは、地域も学生も世代交代時にもう一度原点に立ち返り、その活動が本当に必要か、なぜ必要か再確認する必要があります。学生が変われば当然活動の仕方も変わります。活動の意義、重要性が共有できたら、その本質は変えないという前提の上で、無理して同じことをやるのではなく、今いるメンバーのできることをやればよいという柔軟な考え方で活動に取り組むことも大事です。

これを踏まえて、ボランティアコーディネーターは学生同士の縦のつながりをサポートします。先輩学生には、後輩への引き継ぎまで意識した活動参加を促します。たとえ、活動の主軸が後輩に移っても、先輩にはこれまで関わってきた活動への熱い想いや、培ったノウハウを後輩に伝える重要な役割があります。また、引き継ぎがスムーズに行えるよう、作業手順などを詳細にマニュアルに書き残し後輩に託せるよう伝えます。

学生を受け入れていただく地域団体にも意識的に学生の世代交代に備えてもらえるよう伝えておくことも重要です。たとえば、学生を受け入れる地域には、できるだけ先輩と後輩がセットで活動に参加するよう促し、そのノウハウが自然と継承できるよう工夫してもらいましょう。今いる学生メンバーができることをやればよいという柔軟な考え方で地域の人にも関わってもらうことが大切です。



## キーワード「ツール、ルール、ロールの見直し」

メンバーの入れ替わりが激しい組織においては、組織的な活動を支える3つの要素、ツール（手法）、ルール（規則）、ロール（役割）を定期的に見直し、何を引き継ぐのかを考える必要があります。

### <練習問題>

「ゼミで義務付けられていたから地域ボランティアに参加したけど、その期間が終わったからもうボランティアはいいかな…」と相談に来た学生。受け入れ団体は引き続きゼミ単位での活動継続を期待しています。さて、コーディネーターはどう対応しますか？

# まとめ編

# プロセス別にみたコーディネーターの役割と機能 —地域と学生の〈むすびめ〉を分析する—

地域と学生との「カベ」を乗り越えて、より良い関係をつくるために。大学ボランティアセンターのコーディネーターが担っている機能を、事例をもとに協働のプロセス別に整理しました。

起こりがちなこと



コーディネーターの姿勢・関り方、やるべきこと



準備編（環境づくり）		実践編（協働の開始・実践）		展開編（協働の展開・評価）	
<p><b>双方の誤解・無理解</b> <small>地域→地域から学生に対して 学生←学生から地域・外部に対して</small></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「学生は暇なはず」……………【事例01】【03】</li> <li>地域「学生はマンパワー」……………【02】【04】</li> <li>学生「大学のまわりには何も無い」……………【03】</li> </ul> <p><b>趣旨・目的が不明瞭</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「地域貢献は学生のためになるはず」……………【06】</li> </ul> <p><b>活動条件への誤解</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「ある程度自己負担があって当然」……………【08】</li> <li>学生「そんな話聞いてないし」……………【08】</li> </ul> <p><b>依頼者側のボランティア受け入れに関する合意形成不足</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「来てもらったけど何してもらおうんだっけ？」……………【05】</li> </ul> <p><b>リスクに対する認識不足</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「安全な活動ですから」……………【07】</li> </ul> <p><b>就活のためのボランティア</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生「面接でボランティアをしたと言ったら受けがよさそう」……………【09】</li> </ul>		<p><b>活動目的や想い、情報の共有不足</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「学生歓迎！ やるからには積極的に」……………【10】</li> </ul> <p><b>社会的責任に対する認識不足</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「できないなら言ってくれたらいいのに」……………【11】</li> <li>学生「頼まれたことは断りにくい」……………【11】</li> </ul> <p><b>コミュニケーション手段の違いから生まれる誤解</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「学生への連絡どうすればいいの？」……………【12】</li> <li>学生「SNSを使ってくれればよいのに」……………【12】</li> </ul> <p><b>ハラスメントに対する理解不足</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「男／女なんだから」……………【13】</li> <li>学生「性別で役割分担を決めつけられるのは嫌だなあ」……………【13】</li> </ul> <p><b>学びに対する誤解</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「もっとやる気のある学生を連れてきて」……………【14】</li> <li>地域「学生が考えることが学びにつながる」……………【14】</li> </ul> <p><b>学生への誤解</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「学生が何を考えているのかわからない」……………【15】</li> </ul>		<p><b>ボランティアコーディネーターの役割に対する誤解</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「もっと活動にかかわってくれたらいいのに」……………【16】</li> </ul> <p><b>活動のフォローアップ不足</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「学びを生かして活動するのよね」……………【17】</li> <li>学生「専門知識も経験もないのに」……………【17】</li> </ul> <p><b>活動継続への過度な期待</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域「学生は卒業したら終わりよね」……………【18】</li> <li>学生「学生時代の楽しい思い出になった」……………【18】</li> <li>地域「もっと継続的にかかわって」……………【19】</li> <li>学生「普段できないことができるからやっているだけ」……………【19】</li> <li>地域「先輩が卒業しても後輩がいるでしょ」……………【20】</li> <li>学生「ほかにやりたいことあるし」……………【20】</li> <li>学生「先輩がいないから進め方がわからない」……………【20】</li> </ul>	
<b>地域に対して</b>	<b>学生に対して</b>	<b>地域に対して</b>	<b>学生に対して</b>	<b>地域に対して</b>	<b>学生に対して</b>
<p><b>依頼内容・条件・当日担当者の確認</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>それぞれの思いや言い分をしっかりと聞く</li> <li>ニーズを聴き出し、情報の交通整理</li> <li>ボランティア保険加入の有無確認</li> <li>受け入れに配慮が必要なことを説明</li> </ul> <p><b>目的・目標・評価軸の共有</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>なぜ学生が必要なのか</li> </ul> <p><b>組織内合意形成の確認</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生がふりまわされないために</li> </ul> <p><b>地域と学生双方へお互いの理解を促す</b></p>	<p><b>活動相談(自発性の引き出し)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>なぜ活動に参加したいのか</li> <li>どんなペースで参加したいか</li> <li>興味関心から活動分野を探る</li> <li>当事者だからこそ気づける視点を説明する</li> </ul>	<p><b>進捗確認・経過の見守り</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>経過を見守りつつ必要な情報を収集する</li> <li>客観的なアドバイスをする</li> <li>経過を見守り必要な情報を収集する</li> <li>お互いの連絡方法を確認</li> </ul> <p><b>それぞれの思いや言い分をしっかりと聞く</b></p>	<p><b>進捗確認・経過の見守り</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生の主体性の引き出し</li> </ul>	<p><b>活動の意義を再確認</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>それぞれの思いや言い分をしっかりと聞く</li> <li>ビジョンや問題意識を共有する</li> </ul>	<p><b>活動のフォローアップ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>いつでも相談できる体制づくり</li> </ul>
<p><b>多様な価値感の相互理解の促進</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教育機関としての大学ボランティアセンターの意味を伝える</li> <li>教育的関わり方の理解と共感を促す</li> <li>リスクマネジメントへの理解を促す</li> </ul> <p><b>導入プログラムの実施</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>必要に応じて地域や活動そのものを理解するプログラムを実施</li> </ul> <p><b>情報収集</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生が参加可能なプログラムの情報収集</li> </ul>	<p><b>多様な価値感の相互理解の促進</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域の現状を説明</li> <li>地域で活動する意義を説明</li> </ul> <p><b>オリエンテーション・事前学習会開催</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ゴールを定めて学生をサポート</li> </ul>	<p><b>異文化理解の促進・想いの翻訳</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域の担当者との対話(最近の学生事情等を伝える)</li> <li>教員と地域とを調整するためのノウハウを共有</li> <li>事前説明会等の実施要請</li> <li>学びの仕組みについて合意形成する</li> </ul> <p><b>ハラスメントに対する理解の促進</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>個人の尊重等ハラスメントの理解を促す</li> </ul>	<p><b>異文化理解の促進・想いの翻訳</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生と地域の間に入って中継する</li> </ul> <p><b>ハラスメントに対する理解の促進</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>個人の尊重等ハラスメントの理解を促す。万が一、被害を受けた場合の対処方法を伝えておく。</li> </ul>	<p><b>プログラム内容の再検討</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>まとめた課題を関係者に伝える</li> <li>改善策を提案する</li> <li>必要に応じて、プログラムを作り直す</li> </ul> <p><b>ボランティアコーディネーターの立場の明確化</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>立場・役割の説明</li> </ul> <p><b>活動を継続できる環境整備</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>社会人になっても活動できるメニューや時間帯など活動開発をサポートする</li> </ul>	<p><b>プログラム内容の再検討</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>活動から見てきた課題・改善策をまとめる</li> <li>関わり方の段階を検討(継続・単発)</li> </ul> <p><b>次世代につなぐ仕掛けを作る</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>多様な人材を巻き込む・発掘する</li> <li>共感の連鎖を生み出す</li> <li>社会人ボランティアの活躍事例を紹介し、社会人になっても活動が継続できること、その意義を伝える。</li> </ul>

## 学生と地域との連携に不可欠なボランティアコーディネーション力

筒井 のり子（龍谷大学）

### 1. 大学と地域

「地域との連携」「地域と学生の協働」といったキーワードは、今や大学の様々な学部、また様々な事務部署でもさかんに聞かれるようになった。古くからそうした取り組みに力を入れていた大学もあろうが、多くは2000年代中頃以降、急速に広がりを見せている。

『文部科学白書』の2008（H20）年度版では、「大学の国際化と地域貢献」という章が設けられ、「（1）地域を支える専門人材の育成」と「（2）大学の知的資源の地域社会への還元」について、多くのページを割かれている。また、文科省は2008年度からG P（Good Practice）をキーワードとして、教育の質向上をめざした大学教育改革の取り組みの選定を開始した。「現代的教育ニーズ取組み支援プログラム（現代G P）」や「特色ある大学教育支援プログラム（特色G P）」などで、多くの地域課題の解決をめざした取り組みが採択された。さらに「COC事業」は、大学における地域連携の取り組みをさらに発展させている。

総務省も、“域学連携”という用語を用い、「域学連携」地域づくり活動の推進を図った。すなわち、「大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民やN P O等とともに、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化および地域の人材育成に資する活動」である。2012（H24）年度からは「域学連携地域活力創出モデル実証事業」の採択を行っている。また内閣府も地方創生推進室が、「大学地域連携まちづくりネットワーク」を2006年頃から推進している。

こうした政府の施策の後押しもあり、大学において「地域」とのつながりが強く意識されるようになっていった。

### 2. 大学と地域の連携が求められる背景

そもそも、なぜ、これほどまでに大学と地域の連携・協働の必要性が叫ばれるようになったのだろうか。その背景を、大学側と地域側の双方から簡単に整理しておこう。

#### （1）大学側の事情

2005（H17）年1月に出された中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」では、少子高齢化の影響で大学・短大進学希望者が減少し、2007（H19）年には大学・短大の定員と同数になると指摘されている。いわゆる“全入時代”の到来である。そこで、大学は今まで以上にその存在意義を明確にし、内外にアピールする必要があるが出てきた。

こうしたことから、大学は、「教育機能」「研究機能」をさらに充実させるとともに、大学が所在する地域への「地域貢献」に取り組むことが重要な要素になってきた。大学が保有する知識、技能等を地域に提供することで、地域の発展を支える一員としての存在意義を発揮しようとするものである。

同時に、教育の質的転換が求められてきたという事情もある。2008年の答申「学士課程教育の構築に向けて」、2012年の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」の中で、学生がより主体的に問題を発見し、その解決を探っていくような「能動的学修（アクティブラーニング）」への転換の必要性が指摘されている。その流れで、教室外での学びや地域に出向いての活動等がますます重要視されるようになっていく。

#### （2）地域側の事情

日本は2008年以降、「人口が継続して減少する社会」になった。今、多くの地域で人口減少、高齢化が進んでいる。自治会／町内会への加入率や活動への参加率も低下し、地域活動の担い手不足が深刻になっている。次第にまちの活気が失われ、コミュニティとしての持続可能性が危ぶまれるところもある。

かつて、地域の多くの問題は、地域住民自身の力によって解決されていた。しかし、高度経済成長を経て都市化や核

家族化が進み、人々のライフスタイルが大きく変わる中で、問題解決のための地域の力が低下してしまった。また経済の停滞、自治体の財政逼迫もあり、政府部門（行政）による問題解決の限界も見えている。

こうしたことから、地域社会の側からも大学や学生への期待が高まってきた。大学と連携するメリットとしては、大学に集積する知識や情報やノウハウが活かされる、地域で不足する若い人材力を活用できる、地域の活性化、学生や地域住民の人材育成、といったことが挙げられるだろう。

### 3. 「学生」と「地域」の出会い方

このように、大学と地域の双方に連携・協働のニーズがあり、また連携・協働には双方に大きなメリットがあると考えられる。しかし、どちらのニーズも満たし、どちらにもメリットが得られるような取り組みになるためには、大きな課題がある。実際には、どちらか一方に不満が残ったり、連携・協働の意味が見いだせなかったりするような取り組みも多く見られる。大学と地域の板挟みで、学生にしわ寄せがいくことも少なくない。大学と地域の連携・協働には様々なレベルのものがあるが、ここからは、特に学生が関わる場合に限定して話を進めたい。

「学生と地域の関わり」といった場合も、その内容は実に様々である。正課授業として取り組まれる教育プログラムもあるだろうし、課外活動として特定のサークルやグループによる関わりもあるだろう。その場合も継続的な取り組み、単発の取り組みと様々である。また、一般学生が単発イベントに参加する場合もあるだろう。

一方、地域からの相談・ニーズを受け付ける大学側の部署も多様化している。かつては、学外の団体や地域住民が大学あるいは学生にアクセスする窓口は学生部（課）くらいだった。しかし、最近は一挙にその窓口が拡大している。たとえば、学内のボランティアセンター、地域連携センター、社会連携推進室、エクステンションセンター等が挙げられる。

学生の協力を求める地域側の組織も様々である。自治会／町内会、子ども会、老人クラブ、自主防災組織等の地縁組織、また様々なテーマで活動するN P O、さらに商工会議所や商店街振興組合、自治体などからも、実に多様な依頼が持ち込まれる。

こうした状況の中で、学生と地域の双方にとってよい出会いとなり、双方にとって意味のある取り組みになるようにするために、今、スタッフに切実に求められているのが、ボランティアコーディネーション力なのである。

### 4. 求められるボランティアコーディネーション力

ボランティアコーディネーションとは、「一人ひとりが社会を構成する重要な一員であることを自覚し、主体的・自発的に社会のさまざまな課題やテーマに取り組む」というボランティア活動の意義を認め、その活動のプロセスで多様な人や組織が相互に対等な関係でつながり、新たな力を生み出せるように調整することで、一人ひとりが市民社会づくりに参加することを可能にする働き」である。

そのポイントは、①ボランティア（活動）というものの正しい理解、②多様な人・組織が対等な関係でつながれるようにすること、③多様な人・組織がつながることで新たな力を生み出せるようにすること、④一人ひとりの市民社会づくりへの参加、ということである。以下、この4つについて詳しく述べていきたい。

#### ①ボランティア（活動）の理解

学生と地域との協働において、もっとも重要と思われることの一つは、「ボランティア（活動）」をどのように捉えるかということである。大学教員の中にも、地域住民や自治体職員の中にも、深く考えずに「ボランティア」という言葉を使ったり、あるいは偏ったボランティア観で話を進めようとしたりする人がいる。たとえば、正課授業として（全ての学生に課せられたものとして）地域に出向く場合も、安易に「ボランティア」という言葉が使われてしまうことがあり、自発性の低い学生の受け入れで地域側が疲弊することもある。一方、地域側がボランティアを“無料のお手伝い”と捉えているような場合は、参加した学生の徒労感は大きくなる。

このように、依頼や企画の一つひとつにおいて、地域、大学（教員や職員）、学生の3者の「ボランティア」のイメー

ジをていねいに確認し、調整するという段階が不可欠となる。ボランティアの捉え方を整理したものとして、以下を挙げておきたい。

## 【2】どのようにボランティアを捉えるのか

ボランティアコーディネーターにとって何より重要なことは、ボランティアおよびボランティア活動の本質をどのように理解するかということです。

ボランティア活動は、一般的に「自発性」「連帯性」「無償性」などという言葉で説明されますが、コーディネーターがボランティア活動をどのように捉えているのかは、日常のコーディネーションのあり方と質を左右する重要な要素です。ボランティアに対する私たちの認識を具体的に表現します。

- 2—① ボランティアは「市民社会」を構築する重要な担い手である。
- 2—② ボランティアは自分の意志で始める。
- 2—③ ボランティアは自分の関心のある活動を自由に選べる。
- 2—④ ボランティアは活動に対して責任をもちその役割を果たす。
- 2—⑤ ボランティアは共感を活動のエネルギーにする。
- 2—⑥ ボランティアは金銭によらないやりがいと成果を求める。
- 2—⑦ ボランティアは活動を通して自らの新たな可能性を見出す。
- 2—⑧ ボランティアは活動を通して異なる社会の文化を理解する。
- 2—⑨ ボランティアは活動に新しい視点や提案を示し行動する。

### ②対等な関係でつながれるようにする

「コーディネーション」は単に調整や仲介と訳されることも多いが、この英単語には本来“対等にする、同格にする”という重要な意味が含まれている。学生と地域との協働の場合、まず年齢層の違いによる様々な誤解、“地域”というもののに対する知識や理解の差、組織による意思決定の仕組みの違いなどから、様々な問題が生じやすい。そこで、“対等にする”というはたらき（機能）が、協働を成功させるための重要な基盤となる。

具体的には、次のステップが必要だろう。第1段階は、双方の意識の違いを把握することだ。たとえば、40年前の学生と今の学生とでは、その生活スタイルはかなり違っている。学生に対して“時間がたっぷりある”というイメージを持っている住民には、“授業やバイトで忙しい”学生との実状を知っておいてもらう必要があるだろう。逆に、学生の側も、地域組織や施設、NPOについてどの程度の知識があるのかを確認しておく必要がある。また、上述したように基本的なボランティア観の違いや意思決定のスピードの違いの把握も必要である。さらに、企画について、「地域が学生に期待すること」と「学生が期待すること」も確認しておかねばならない。このように、まずはどのような違いがあるのかを対話や観察から把握することが必要となる。

第2段階は、それをふまえての具体的な提案、調整である。たとえば、企画について地域側と学生との期待にズレがある場合は、双方が納得できるようなプログラム修正を具体的に提案する。地域側には学生の、学生には地域側の思いを代弁することも必要かもしれない。さらに活動時間の長さや役割、また交通費や昼食などの細かな調整も実は大変重要である。こうした細かな調整をすることで、よりよい協働が実現するのである。

### ③新たな力を生み出す／④市民社会づくりへの参加

さらに、「なぜ協働するのか」という確認を繰り返し行う。すなわち、ただ「不足している部分（人数やスキル）を補う」というものではなく、地域と学生という異なるものが一緒に取り組むことで、それまでになかった新たな力が生み

出されることをめざすのである。そのためには、学生が、単なるお手伝いという意識ではなく、地域の実状や課題を理解し、それに取り組む地域の人々の思いを知り、問題意識をもって取り組んでいけるようにする必要がある。たとえば、事前に学習会を開催したり、地域の人々の思いを聞く機会を設けたりするなどの配慮が重要となる。さらに、活動後に振り返りの場を設けることも大変重要である。

こうしたことで、学生のより主体的な参加を生み出し、市民自治の意識を醸成し「市民社会づくり」へとつながっていくのである。

### 5. 専門職としてのボランティアコーディネーターの役割

さて、ここまでボランティアコーディネーション力について述べてきた。基本的にボランティアコーディネーション力は、大学内で地域との連携が求められる部署のスタッフすべてに求められるものである。とはいえ、様々な業務の中の一部であり、地域の人々や学生との対応にあてられる時間が十分にとれないスタッフも多いだろう。また、大学内の職員異動もあるため、担当スタッフ自身が、地域の諸団体や活動の実態を把握しきれていない場合もあるだろう。

そこで、「ボランティアコーディネーター」の存在が大きな意味を持つ。ボランティアコーディネーターは、先に紹介したボランティアコーディネーションのはたらきを主たる業務とする専門職である。ボランティアコーディネーターは、まさに「ボランティア（活動）」について、深い理解と多様な知識をもつ存在である。さらに日頃から地域の諸団体や広域のNPO等の情報収集を行い、キーパーソンとのネットワークの構築に努めている。そして学生や地域の人々の思いを受け止める相談対応力も必要とされている。

最近は学内にボランティアセンターを設置し、ボランティアコーディネーターを配置する大学も増えてきた。大学と地域との連携・協働の一環としての位置づけがなされているところも多い。しかし、残念ながらボランティアセンターで蓄積されたボランティアコーディネーションのノウハウは、必ずしも他の部署のスタッフに波及しているとは言えない。ボランティアセンターやボランティアコーディネーターは、実は大学全体の地域貢献や地域との連携・協働の推進において、大変重要な存在と言える。今後、地域や学生へのボランティアコーディネーターの専門的な関わりが学内で認識され、共有されていくことが求められている。関西地区の大学ボランティアセンター担当者の研究成果としての本書が、その一助になることを願ってやまない。

i 総務省ホームページより  
[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html)

ii 認定特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会編 早瀬昇・筒井のり子著『ボランティアコーディネーション力～市民の社会参加を支えるチカラ』中央法規、2015年6月、P92

iii 「ボランティアコーディネーター基本指針～追求する価値と果たすべき役割～」日本ボランティアコーディネーター協会、2004年9月発行

### 全国の大学ボランティアセンターの一覧

エリア	名 称	
北海道	北海道大学学生ボランティア活動相談室	
	北星学園大学スミス・ミッションセンター	
	名寄市立大学地域交流センター	
東北	弘前大学ボランティアセンター	
	岩手県立大学学生ボランティアセンター	
	東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室	
	東北学院大学災害ボランティアステーション	
	宮城学院女子大学リエゾン・アクションセンター	
	東北福祉大学学生支援センターボランティア支援室	
	仙台大学ボランティアセンター	
	桜の聖母短期大学ボランティアセンター	
	福島大学災害ボランティアセンター	
	いわき明星大学ボランティアセンター	
	東日本国際大学・いわき短期大学ボランティアセンター	
	関東	常磐大学地域連携センター
		筑波学院大学 OCP 推進室 (オフ・キャンパス・プログラム)
茨城大学教育学部附属教育実践総合センター		
宇都宮大学学生ボランティア支援室		
国際医療福祉大学 IUHW ボランティアセンター		
高崎健康福祉大学ボランティア・市民活動支援センター		
群馬医療福祉大学ボランティアセンター		
東京家政大学地域連携推進センター		
東洋大学学生ボランティアセンター (板倉キャンパス/川越キャンパス/朝霧キャンパス/白山キャンパス)		
聖学院大学ボランティア活動支援センター		
駿河台大学ボランティア活動支援室		
立正大学社会福祉学部ボランティアセンター		
立教大学ボランティアセンター (新座キャンパス/池袋キャンパス)		
文京学院大学地域連携センター		
神田外語大学ボランティアセンター		
千葉科学大学ボランティアセンター (CISVC)		
千葉大学ボランティア活動支援センター		
淑徳大学地域支援ボランティアセンター (千葉キャンパス)		
明治大学ボランティアセンター (中野ボランティアセンター/和泉ボランティアセンター/駿河台ボランティアセンター/生田ボランティアセンター)		
成蹊大学ボランティア支援センター		
日本社会事業大学災害ボランティアセンター		
青山学院大学ボランティアステーション		
中央大学ボランティアセンター		
東京女子大学ボランティア・ステーション		
東京外国語大学ボランティア活動スペース VOLAS		

エリア	名 称
関東	東京大学救援・復興支援室ボランティア支援班
	法政大学ボランティアセンター (小金井ボランティアセンター/多摩ボランティアセンター/市ヶ谷ボランティアセンター)
	亜細亜大学ボランティアセンター
	明星大学ボランティアセンター
	淑徳大学短期大学部ボランティアセンター
	清泉女子大学ボランティアセンター
	昭和女子大学コミュニティサービスラーニングセンター
	国際基督教大学 (ICU) サービス・ラーニング・センター
	聖心女子大学マグダレナ・ソフィアセンター
	上智大学ボランティア・ビューロー
	中部
東京女子体育大学地域交流センター	
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター	
首都大学東京ボランティアセンター	
東京工芸大学ボランティア支援センター	
神奈川県立保健福祉大学ボランティアセンター	
聖セシリア女子短期大学ボランティアルーム	
和泉短期大学実習・ボランティアセンター	
明治学院大学ボランティアセンター (横浜キャンパス/白金キャンパス)	
神奈川大学ボランティア活動支援室	
フェリス女学院大学ボランティアセンター	
上智大学短期大学部サービスラーニングセンター	
新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部ボランティアセンター	
新潟医療福祉大学学生ボランティアセンター	
敬和学園大学ボランティアセンター	
新潟大学学生ボランティア本部 ボラんち。	
富山短期大学地域連携センター	
富山福祉短期大学ボランティアセンター	
福井大学災害ボランティア活動支援センター	
仁愛女子短期大学地域活動実践センター	
健康科学大学ボランティアセンター	
特定非営利活動法人長野大学ボランティアセンターふらっと	
松本大学地域づくり考房『ゆめ』	
清泉女学院大学・清泉女学院短期大学ボランティアオフィス	
岐阜経済大学ボランティアラーニングセンター	
正眼短期大学ボランティアセンター	
岐阜大学キャリアセンター (学生ボラネット)	
東海学院ボランティアセンター	
常葉大学社会貢献・ボランティアセンター [HUVOC]	
静岡福祉大学地域交流センター	

エリア	名 称
中 部	静岡福祉大学地域交流センター
	静岡英和学院大学ボランティアセンター
	鈴鹿医療科学大学ボランティアセンター
	皇學館大学ボランティアルーム
	愛知学院 AGU ボランティアセンター
	愛知県立大学学生ボランティア・ステーション
	日本福祉大学災害ボランティアセンター
	名城大学ボランティア協議会
	中部大学ボランティア・NPO センター
	名古屋学院大学学生支援センター「S- プラッツ」
	愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター（星が丘キャンパス/長久手キャンパス）
関 西	龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター（瀬田キャンパス/深草キャンパス）
	立命館大学サービスラーニングセンター（びわこ・くさつキャンパス/衣笠キャンパス/大阪いばらきキャンパス）
	京都文教ボランティアセンター
	佛教大学社会連携センター学生ボランティア室
	京都産業大学ボランティアセンター
	梅花女子大学ボランティアルーム
	関西大学学生センターボランティアセンター 事務室
	桃山学院大学ボランティア活動支援室
	大阪キリスト教短期大学ボランティアコーナー
	大阪府立大学ボランティアセンター V-station
	大阪市立大学ボランティアセンター
	大阪大学キャンパスライフ支援センター
	兵庫教育大学教職キャリア開発センターボランティアステーション
	関西国際大学地域交流総合センター（三木キャンパス/尼崎キャンパス）
	関西学院ヒューマンサービスセンター
	関西福祉大学学生ボランティア活動支援センター
	神戸医療福祉大学ボランティア活動支援センター
	神戸学院大学ボランティア活動支援室（ポートアイランドキャンパス/有瀬キャンパス）
	神戸市外国語大学ボランティアコーナー
	流通科学大学ボランティア支援室
	神戸大学学生ボランティア支援室
	神戸大学総合ボランティアセンター
	甲南女子大学対外協力センター
	神戸常盤ボランティアセンター
	甲南大学地域連携センター
	神戸親和女子大学地域交流センター
	奈良教育大学次世代教員養成センター ボランティア・サポート・オフィス

エリア	名 称
関 西	帝塚山大学心理福祉学部ボランティアルーム
	畿央大学ボランティアセンター
	奈良県立大学学生ボランティア支援室
中 国	吉備国際大学順正学園ボランティアセンター
	川崎医療福祉大学ボランティアセンター
	美作大学・美作大学短期大学部ボランティアセンター
	岡山理科大学科学ボランティアセンター
	広島国際大学ボランティアセンター
	福山平成大学ボランティア情報室
	広島大学ボランティア情報室
	広島修道大学ピア・カウンター
	広島女学院大学ボランティアセンター
	山口県立大学学生生活動支援センターボランティア窓口
四 国	四国大学学生ボランティア活動支援室
	松山東雲ボランティアセンター
	聖カタリナ大学学生ボランティアセンター
九 州	北九州市立大学地域共生教育センター
	西南学院大学ボランティアセンター事務室
	福岡県立大学 社会貢献・ボランティア支援センター
	九州龍谷短期大学学生ボランティアセンター
	長崎純心大学ボランティアビューロー
	長崎国際大学ボランティアセンター
	宮崎大学農学部ボランティア支援室
	九州保健福祉大学ボランティアセンター
	鹿児島大学ボランティア支援センター
	鹿屋体育大学学生スポーツボランティア支援室
鹿児島純心女子大学ボランティア支援の会	
沖 縄	沖縄国際大学福祉・ボランティア支援室

2016年1月31日現在 提供：特定非営利活動法人ユースビジョン

# 本プロジェクトに関連した 関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会の主な実績

2014～2015年度

<p>2013年11月27日</p>	<p><b>第24回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催</b> 【事例検討】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・冊子企画（「地域と大学の連携におけるコーディネーターの専門性と役割」について）</li> <li>・事例研究の課題の洗い出しワーク・フリーディスカッションの課題の整理</li> </ul>	<p>2015年6月29日</p> <p><b>第31回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2015年度の協議会の持ち方について</li> </ul> <p>【事例検討】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ケーススタディ集「学生と地域の”ホンネ”を用いた大学—地域連携の推進プロジェクト検討</li> <li>・テーマ：「社会人になっても活動を続ける」、「ハラスメントの問題」、「ボランティア経験は『就職活動』に生かせる？」など</li> <li>・大学ボランティアセンターを取り巻く課題の共有、解決のための意見交換</li> </ul>
<p>2014年1月9日</p>	<p><b>第25回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催</b> 【事例検討】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域と学生とのギャップの調整ケース検討「他団体と大学および学生とのギャップに関する対応で良かったこと／困ったこと」</li> <li>・大学ボランティアセンターを取り巻く課題の共有、解決のための意見交換</li> </ul>	<p>2015年7月27日</p> <p>ケーススタディ集 「学生と地域の”ホンネ”を用いた大学—地域連携の推進プロジェクト」編集会議</p>
<p>2014年5月22日</p>	<p><b>第26回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催</b> 【事例検討】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域と学生とのギャップの調整ケース検討</li> <li>・テーマ：「お金の切れ目が縁の切れ目？」、「ボランティアはどこまで答えたらいいの？」、「学生も運営メンバーになってほしい」ほか</li> <li>・大学ボランティアセンターを取り巻く課題の共有、解決のための意見交換</li> </ul>	<p>2015年8月25日</p> <p>ケーススタディ集 「学生と地域の”ホンネ”を用いた大学—地域連携の推進プロジェクト」編集会議</p>
<p>2014年7月1日</p>	<p><b>第27回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催</b> 【事例検討】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域と学生とのギャップの調整ケース検討</li> <li>・テーマ：「持ち込まれた企画に難あり？」、「うまくいかない…意思疎通」、「ボランティアセンターは人材派遣会社か？」ほか</li> <li>・大学ボランティアセンターを取り巻く課題の共有、解決のための意見交換</li> </ul>	<p>2015年10月26日</p> <p><b>第32回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ケーススタディ集「学生と地域の”ホンネ”を用いた大学—地域連携の推進プロジェクトの総括分析や発表の仕方について</li> </ul> <p>【事例検討】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域と学生とのギャップの調整ケース検討</li> <li>・テーマ：「学生への誤解」、「配慮が必要な学生によるボランティア」など</li> <li>・大学ボランティアセンターを取り巻く課題の共有、解決のための意見交換</li> </ul>
<p>2014年9月5日</p>	<p><b>第28回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催</b> 【事例検討】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域と学生とのギャップの調整ケース検討</li> <li>・テーマ：「学生は活動が長続きしない？」、「ボランティアだからドタキャンOK？」、「ダラダラ=やる気がない？」ほか</li> <li>・大学ボランティアセンターを取り巻く課題の共有、解決のための意見交換</li> </ul>	<p>2015年12月10日</p> <p><b>第33回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ケーススタディ集「学生と地域の”ホンネ”を用いた大学—地域連携の推進プロジェクトの総括分析について</li> </ul> <p>【学習会】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「学生のボランティア活動の評価の考え方やその手法」</li> <li>・講師：山田一隆氏（岡山大学地域総合研究センター准教授）</li> <li>・大学ボランティアセンターを取り巻く課題の共有、解決のための意見交換</li> </ul>
<p>2014年11月25日</p>	<p><b>第29回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催</b> 【事例検討】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域と学生とのギャップの調整ケース検討</li> <li>・テーマ：「引率者は現場監督なの?!」、「学生を受け入れる合意は取れていますか？」、「ボランティアは『何でも屋』か？」ほか</li> <li>・大学ボランティアセンターを取り巻く課題の共有、解決のための意見交換</li> </ul>	<p>2016年2月9日</p> <p>ケーススタディ集 「学生と地域の”ホンネ”を用いた大学—地域連携の推進プロジェクト」編集会議</p>
<p>2015年1月29日</p>	<p><b>第30回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催</b> 【事例検討】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域と学生とのギャップの調整ケース検討</li> <li>・テーマ：「学生のやる気が出ないのはなぜ？」、「ボランティアのリスクは誰の責任？」、「学生の世代交代を考える」ほか</li> <li>・大学ボランティアセンターを取り巻く課題の共有、解決のための意見交換</li> </ul>	<p>2016年3月15日 (予定)</p> <p><b>第34回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2016年度の活動テーマや事務局体制について</li> <li>・ケーススタディ集「学生と地域の”ホンネ”を用いた大学—地域連携の推進プロジェクトの総括</li> </ul>

※ 2013年度以前の実績は、大阪ボランティア協会のウェブサイト（<http://www.osakavol.org/03/daigaku-vc/>）にて、ご覧いただけます。

## 関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会

本会は、大学ボランティアセンター(以下、「センター」)とする)のあり方を検討し、大学ボランティアコーディネーター(以下、「コーディネーター」とする)の専門性向上とセンターの存在価値を高め、認知度向上をめざして活動しています。大学ボランティアセンターの事業や運営における共通の課題や成果を共有し、事例研究や情報交換などによって、センターのあり方検討やコーディネーターの専門性向上をめざす場として研究会等を開催しています。

### <2014～2015年度参加団体>

大阪府立大学ボランティアセンター V-station  
関西大学ボランティアセンター  
関西学院大学ヒューマンサービスセンター (2014年度まで)  
京都産業大学ボランティアセンター  
京都文教ボランティアセンター  
神戸学院大学ボランティア活動支援室  
神戸市外国語大学ボランティアコーナー  
神戸常盤ボランティアセンター  
奈良教育大学ボランティア・サポート・オフィス  
立命館大学サービスラーニングセンター  
龍谷大学ボランティア・NPO活動センター  
特定非営利活動法人 ユースビジョン (2015年度より)  
社会福祉法人 大阪ボランティア協会【事務局】

### 【2014年度世話人】

井上 泰夫 (京都産業大学ボランティアセンター)  
小島 道子 (奈良教育大学ボランティア・サポート・オフィス)  
白井 恭子 (立命館大学サービスラーニングセンター)  
松居 勇 (大阪府立大学ボランティアセンター V-station)  
岡村こず恵 (社会福祉法人 大阪ボランティア協会)【事務局】

### 【2015年度世話人】

井上 泰夫 (京都産業大学ボランティアセンター)  
小島 道子 (奈良教育大学ボランティア・サポート・オフィス)  
白井 恭子 (7月まで) / 高橋あゆみ (8月より) (立命館大学サービスラーニングセンター)  
戸谷 富江 (神戸常盤ボランティアセンター)  
岡村こず恵 (社会福祉法人 大阪ボランティア協会)【事務局】  
(以上、敬称略)

## 学生と地域のホンネ ～大学のコーディネーション力を生かす～

2016年3月発行

関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会 (事務局: 社会福祉法人大阪ボランティア協会)

**住所** 〒540-0012 大阪府大阪市中央区谷町2丁目2-20 2F

**電話** 06-6809-4901 FAX: 06-6809-4902 URL: <http://www.osakavol.org/>

